

明日香村発掘調査報告会 2004

平成16年12月5日

明日香村教育委員会



開 会 1:00～

調査報告 1:10～

「島庄遺跡の調査」 高橋 幸治

「マルコ山古墳の調査」 西光 慎治

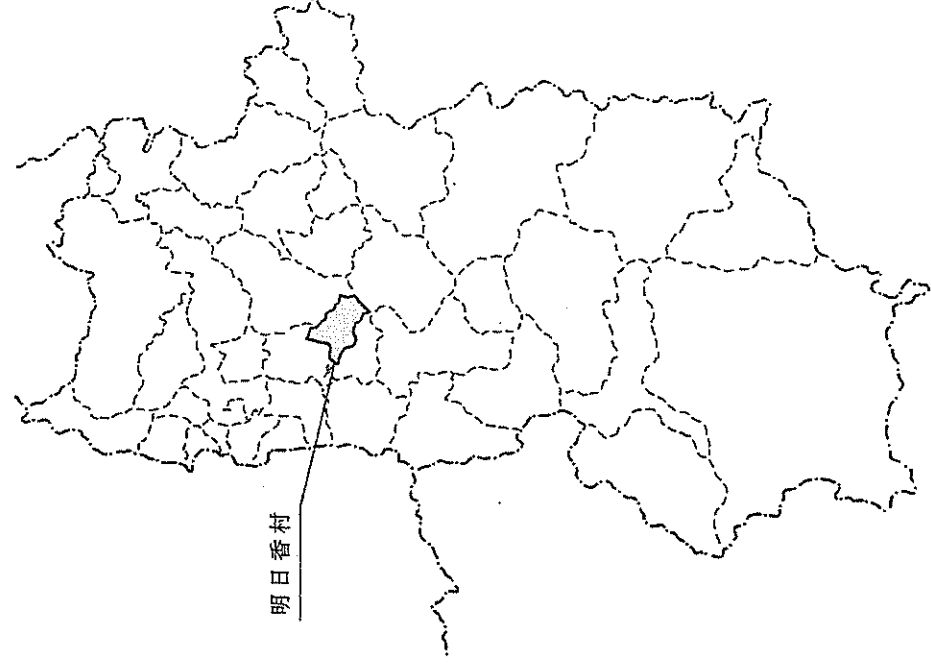
「キトラ古墳の調査」 相原 嘉之

記念講演 2:50～「私見・キトラ古墳の壁画—天文図・十二支像の持物について—」

講師 網干 善教氏

明日香村文化財顧問 関西大学名誉教授

閉会



明日香村



明日香村内主要遺跡地図

島庄遺跡（2003-18次）の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字祝戸・島庄

調査原因：範囲確認調査

調査面積：約 500 m²

調査期間：2003年1月7日～3月20日

はじめに

島庄遺跡は鳴宮推定地一帯に広がる縄文時代以降の複合遺跡である。島庄には『日本書紀』や『万葉集』の記述から蘇我馬子の「飛鳥河の傍の家」や草壁皇子の「鳴宮」が存在したとされており、蘇我馬子の邸宅には池をもつ庭園があったことが知られている。蘇我本宗家の滅亡後、邸宅のあった鳴の地は没収となったようで、壬申の乱の直前には天武天皇が吉野宮に行く途中に立ち寄っている。鳴宮自体は奈良時代まで官によって維持・管理されており、その重要性が窺える。これらの施設があった「鳴（宮）」の範囲については『万葉集』に「橘の鳴宮」とあるように、現在の島庄から飛鳥川を越えた東橘までの広範囲にわたっていたようで、そこでは両側に廓状の建物を伴う掘立柱建物などが検出されている。

島庄遺跡の発掘調査は昭和 47 年度から橿原考古学研究所によって 20 数次にわたって行われており、飛鳥時代の遺構としては一辺約 40m の方形池や石組暗渠・曲溝・川跡・小池・掘立柱建物等が検出されている。

明日香村教育委員会では平成 16 年 1 月から島庄遺跡の範囲確認調査を実施しており、今年度その一年目にあたる。

検出遺構

調査の結果、飛鳥時代の掘立柱建物群を検出した。これらの建物群については方位や重複関係等から 4 つの群に分けられる。

- A 群 北から約 30° 振れる遺構（建物①・②・③）
- B 群 北から約 50° 振れる遺構（建物④）
- C 群 北に対する振れがほぼない遺構（建物⑤・⑥・⑦）
- D 群 北から約 15° 振れる遺構（建物⑧・⑨）

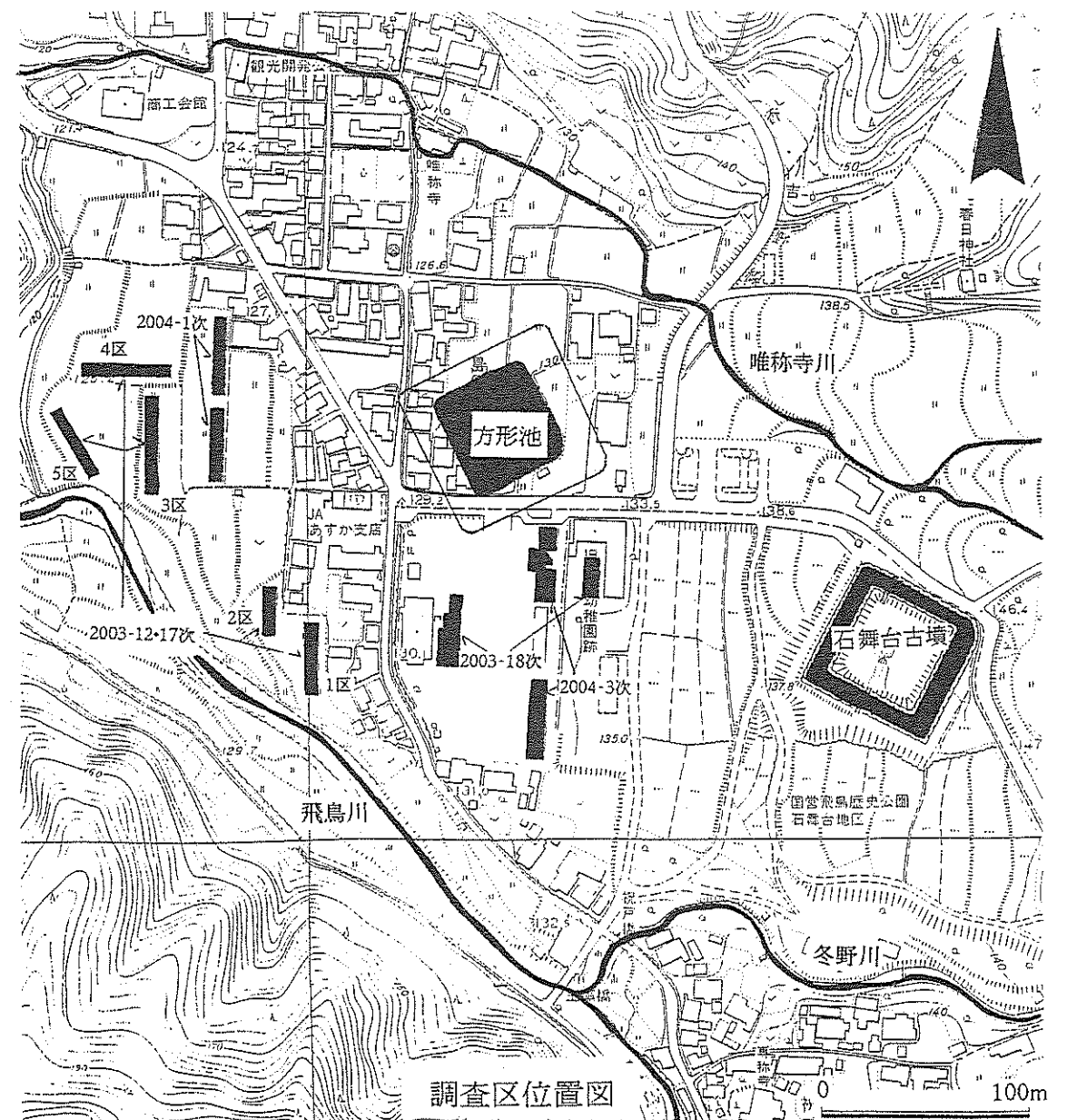
各群に分けた建物群の年代については周辺部の調査成果等から、A 群は方形池と同じ方位で 7 世紀前半、B 群は 7 世紀中頃と考えられる。C 群は正方位に建てられたもので、7 世紀後半と推定される。D 群についてはいまのところ同じ方位を持った遺構は確認されておらず、年代は明らかではない。また A 群については建物①と建物②・③では振れが若干異なることから更に細分できる可能性も考えられる。

出土遺物

縄文土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦・石器などが出土している。

まとめ

今回の調査では、方形池の南側で数時期にわたる建物群を検出することができた。特に A 群と C 群については柱穴が一辺 1 m 以上もある大型建物で、その時期が 7 世紀前半と後半に推定されることから、蘇我馬子の「飛鳥河の傍の家」や「鳴宮」の時代とも重なっており、その関連性が注目される。



島庄遺跡 (2004-3次) の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字祝戸・島庄

調査原因：範囲確認調査

調査面積：約 715 m²

調査期間：2004年6月10日～9月13日

はじめに

今回の調査地は、平成15年度に発掘調査を行った石舞台駐車場の東端にあたる。前回の調査では、7世紀前半・中頃・後半の時期が想定されている建物群が検出されている。これらの建物群は、方位や重複関係等から大きく4つの群に分けられ、A群が7世紀前半、B群が7世紀中頃、C群が7世紀後半、D群が年代不詳と位置づけられている。A群の建物は、調査地北側で検出されている方形池と同じ方位で検出されており、時期推定の根拠の一つとされる。

今回の調査は、グラウンド東端で南北に計3ヶ所トレンチを設け調査を行った。

検出遺構

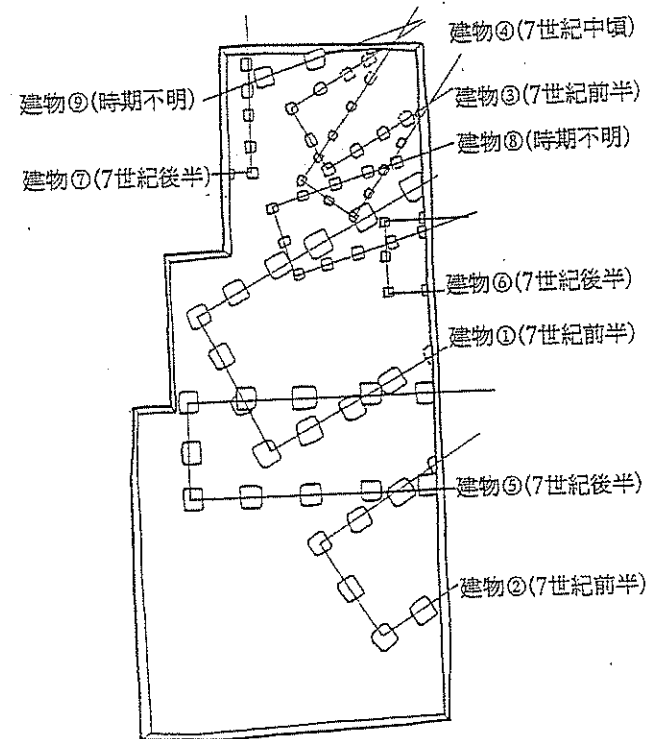
三箇所のトレンチのうち、中央のトレンチにおいて、飛鳥時代の掘立柱塀もしくは柵列になる遺構を検出した。柱掘形の規模は径約80cm、掘形の距離は心々で2.4mの規模をもつ。方位は北から約25～30°振れている。柱掘形は、東西方向で4間分を検出した。この遺構は、前回の調査で検出されたA群の建物と方位が一致することから、同時期である可能性が考えられる。北側のトレンチにおいては、中世の掘立柱建物を検出しており、中世島庄の歴史を考えるうえで重要な資料を得ることができた。また、北側のトレンチ、中央のトレンチでは、下層に縄文土器・弥生土器を中心とした包含層が存在していることが明らかとなり、これらの時期の遺構が存在している可能性が高まった。

出土遺物

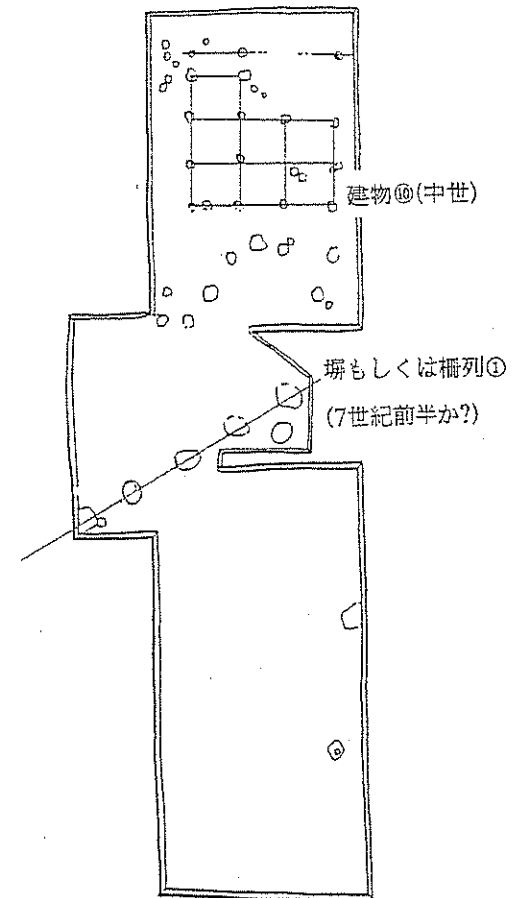
サヌカイト剥片、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦などが出土している。

まとめ

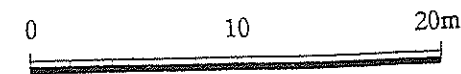
今回の調査では、縄文土器・弥生土器を中心とする遺物包含層、飛鳥時代の塀もしくは柵列や、中世の掘立柱建物が検出された。特に飛鳥時代の遺構として、7世紀前半にあたる可能性が高い塀もしくは柵列が検出されたことによって、前回の建物群が当調査区まで広がっていたことが明らかになった。



2003-18次調査区



2004-3次調査区



島庄遺跡遺構略測図

付、「嶋宮」関係資料(稿)

『日本書紀』

【馬子の嶋家】

・推古 34 年 5 月の条

「飛鳥河の傍に家せり。乃ち庭の中に小なる嶋を池の中に興く。故、時の人、嶋大臣に日ふ。」

・皇極 3 年 6 月の条

「時に、謡歌三首有り。其の一に曰はく、遙遙に 言そ聞ゆる 嶋の藪原」

・皇極 4 年 6 月の条

「是に、或人、第一の謡歌を説きて曰く、『其の歌に『遙遙に、言そ聞ゆる、嶋の藪原』と所謂ふは、此、宮殿を嶋大臣の家に接せて起てて、中大兄、中臣鎌子連と密に大義を圍りて、入鹿を戮さむと謀れる兆なり』といふ。」

【嶋 宮】

・天武即位前紀世 4 年 10 月の条

「是の夕に、嶋宮に御します。癸未に、吉野に至りて居します。」

・天武元年 9 月の条

「庚子に、倭京に詣りて、嶋宮に御す。癸卯に、嶋宮より岡本宮に移りたまふ。」

・天武 5 年 正月の条

「乙卯に、祿を置きて西の門の庭に射ふ。的に中るひとには祿給ふこと差有り。是の日に、天皇、嶋宮に御して宴したまふ。」

・天武 10 年 9 月の条

「辛丑に、周芳國、赤龜を貢れり。乃ち嶋宮の池に放つ。」

・持統 4 年 3 月の条

「朔丙申に、京と畿内との人の、年八十より以上なる者に、嶋宮の稻、人ごとに二十束賜ふ。其の位有る者には、布二端加し賜ふ。」

『万葉集』

嶋の宮勾の池の放ち鳥 人目に恋ひて池に潜かず (巻二-170)

高光るわが日の皇子の 万代に国知らさまし嶋の宮はも (巻二-171)

嶋の宮上の池なる放ち鳥 荒びな行きそ 君まさずとも (巻二-172)

高光るわが日の皇子のいましせば 嶋の御門は荒れざらましを (巻二-173)

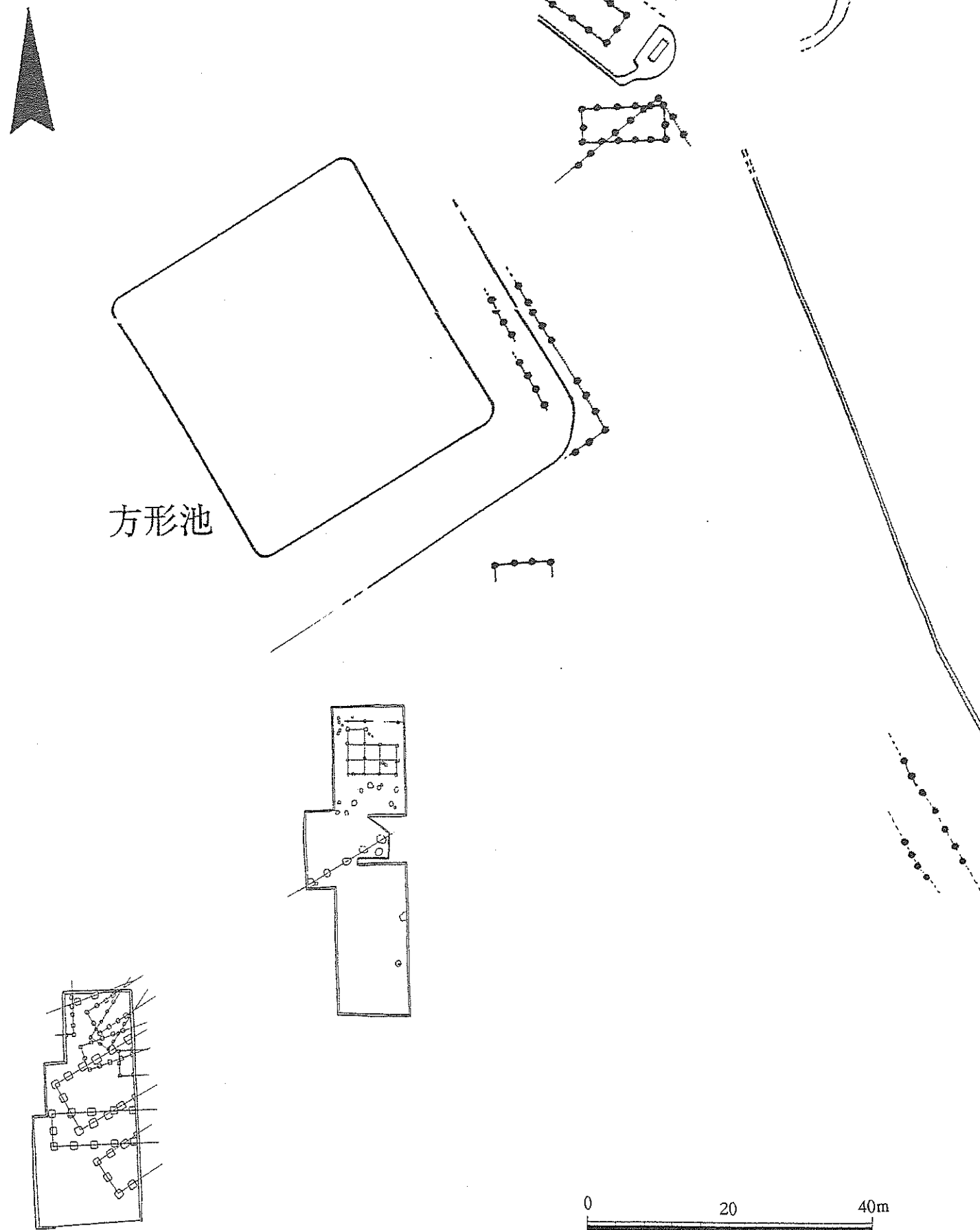
橋の嶋の宮には飽かねかも 佐田の岡辺に侍宿しに行く (巻二-179)

わが御門千代永久に栄えむと 思ひてありしわれし悲しも (巻二-183)

東の滝の御門にさもらへど 昨日も今日も召すこともなし (巻二-184)

一日には千たび参りし 東の大き御門を入りかてぬかも (巻二-186)

朝日照る嶋の御門に おほほしく人音もせねばもうら悲しも (巻二-189)



遺構周辺図

マルコ山古墳の調査

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村大字真弓小字ミツツ 143-2

調査目的 範囲確認調査

調査期間 平成16年4月26日～現在継続中

調査面積 約54㎡

調査機関 明日香村教育委員会

はじめに

マルコ山古墳は高松塚古墳やキトラ古墳と同様に飛鳥を代表する終末期古墳である。周辺には岩屋山古墳や牽牛子塚古墳、真弓鑑子塚古墳などが点在している。この地域は真弓崗と呼ばれる地で飛鳥時代を演出した人々の奥津城として多くの古墳が築かれておりマルコ山古墳もその一つである。大正時代に刊行された『高市郡古墳誌』の中には「マルコ山塚」として紹介されている。マルコ山古墳が注目された契機については昭和47年に高松塚古墳で極彩色の壁画が発見され、大字真弓にあるマルコ山古墳が立地や形態が高松塚古墳と似ていることから、壁画古墳ではないかと注目されていた。その後、マルコ山古墳の本格的な調査が昭和52年から行われ、壁画は確認されなかったが埋葬施設は高松塚古墳と同じ構造をした横口式石槨で墳丘の周囲にはバラス敷きや暗渠排水溝を有した終末期古墳であることが明らかとなっている。平成2年度以降、環境整備事業に伴い古墳の西側部分を除く範囲が整備されている。

今回、残された墳丘の西側部分の構造を解明することを目的として範囲確認調査を実施した。

これまでの調査

- 第1次(1977) 墳丘北側でバラス敷きと暗渠排水溝を検出。
- 第2次(1978) コロレールと暗渠排水溝の検出。石槨内部の調査。
- 第3次(1991) 史跡整備に伴う範囲確認調査と温湿度観測用のガイドパイプの敷設
- 第4次(2004) バラス敷きと暗渠排水溝の検出。多角形墳であることを確認。

検出遺構と出土遺物

【墳丘】

上段 下段裾から約2.7m東で上段裾部を検出している。

下段 下段の裾部分を約7mにわたって検出している。裾部分は岩盤を南北方向に直線的に削り出しており、途中約6mの地点から屈曲して背面カットに並行するように北東方向へ伸びている。下段の高さは裾からテラス面まで約80cmを測り、基底部の約40cmは岩盤でそれより上部は版築で構成されている。下段テラスの幅は約1.5mあり、上面には拳大のバラスが施されている。

【外部施設】

バラス 北側では幅約2m、南端では約2.7m分を確認し、更に調査区外に伸びていく。バラス面は調査区の北と南では比高さが約50cmあり、北から南に傾斜していることがわかる。石材には拳大の川原石が使用されており、中には吉野川流域で採れる結晶片岩や室生ダム北方で採れる流紋岩質溶結凝灰岩(榛原石)も含まれている。

暗渠排水溝 調査区の北西部で攪乱にともなって破壊されたバラス面の下層から暗渠排水溝を検出している。暗渠は地山を幅約30cm掘り込んで川原石を充填している。暗渠は背面カットの裾部に沿うように検出しており、平成元年度の調査区で確認された暗渠と繋げると長さ約20mとなる。

出土遺物 凝灰岩や瓦器片などが少量出土している。

総括～まとめと今後の課題

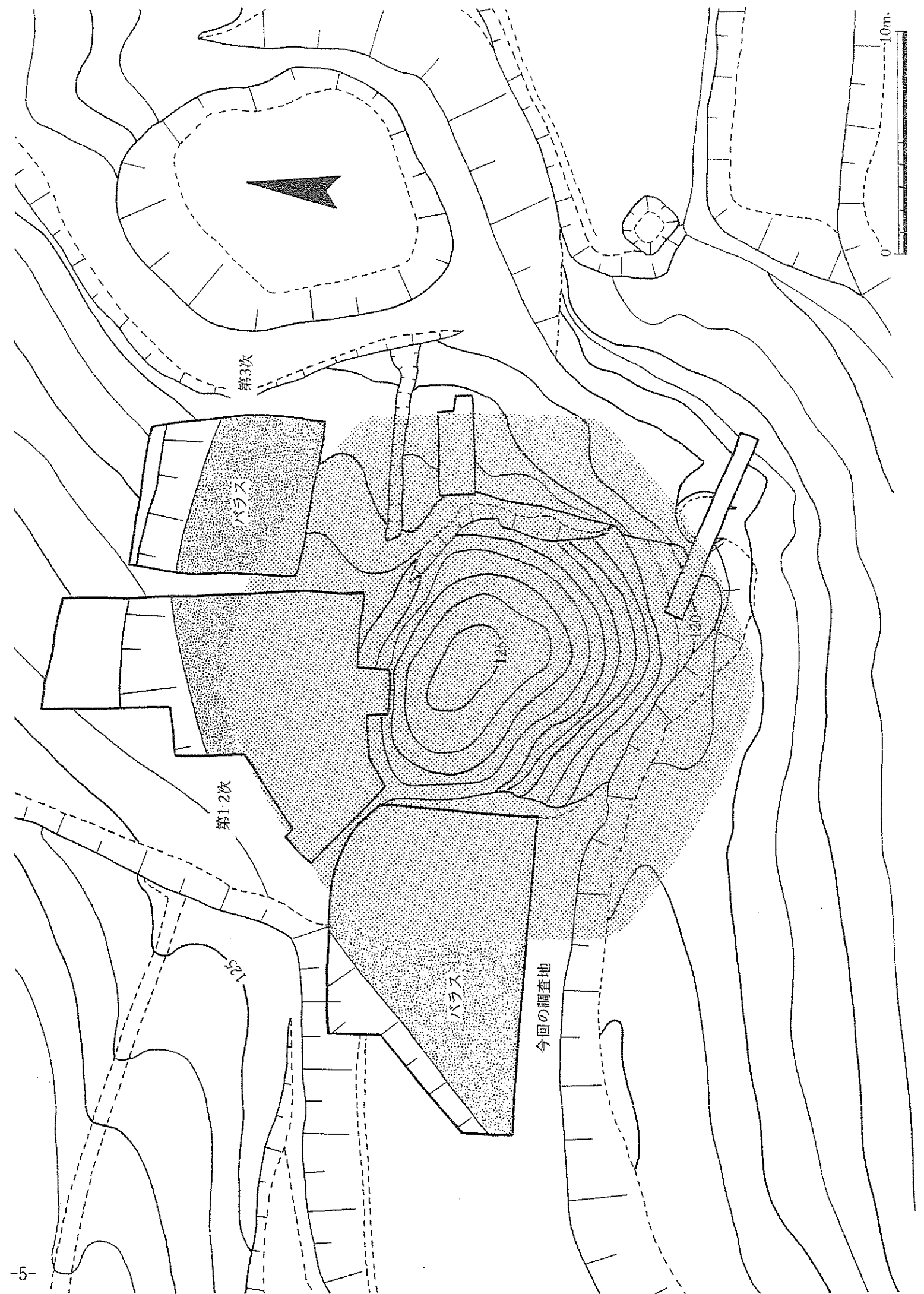
今回の調査では昭和52年度の調査で確認されたバラスや暗渠排水溝の延長部分を検出することができた。これらの施設は山側からくる水を防ぐためにバラスや暗渠排水溝を設けるなど入念な造りとなっている。特にバラス敷きは排水機能だけではなく、装飾的なものとして視覚効果が大きかったと考えられる。明日香村内にある同時期のキトラ古墳や高松塚古墳ではバラスや暗渠排水溝は確認されていませんが、キトラ古墳では暗渠排水溝が検出されており、今回みつかった暗渠排水溝も墳丘周辺を取り巻く暗渠であったことがわかる。墳丘形態については墳丘下段裾のラインが直線的で、途中から屈曲して伸びており、多角形墳であることが明らかとなった。多角形墳についてはこれまで飛鳥地域でも中尾山古墳や東明神古墳で確認されている。これらはすべて八角形墳でありマルコ山古墳の場合、これまでの調査成果を総合すると一辺の長さが約12mとなり、対角長約24mの六角形墳の可能性が高まった。

このようにマルコ山古墳ではこれまで円墳と考えられていましたが多角形墳であることが明らかとなり、周囲にバラス敷きや暗渠排水溝を設けていることが改めて確認されたことで今後、飛鳥の終末期古墳を考える上で重要な資料となるでしょう。

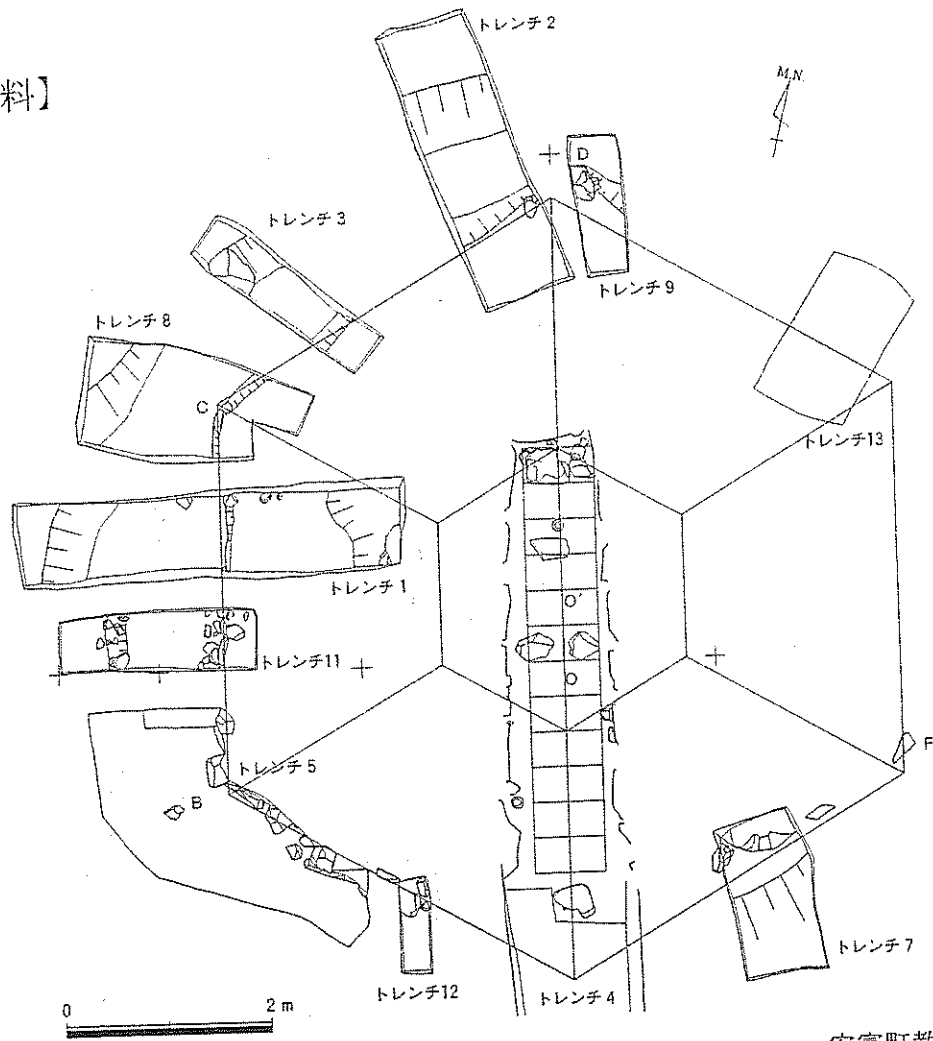
	古墳名	規模 (m)	墳形	築造年代	所在地	備考
1	マルコ山古墳	23.6	六角形	7世紀末～8世紀初	奈良県	
2	塩野六角古墳	7.5	六角形	7世紀中葉	兵庫県	
3	奥池3号墳	6.9	六角形	7世紀中葉	岡山県	
4	御廟野古墳	46.2	八角墳	7世紀第Ⅲ四半期	京都府	現、天智陵
5	段ノ塚古墳	45.0	八角墳	7世紀第Ⅱ四半期	奈良県	現、舒明陵
6	野口王墓古墳	42.6	八角墳	7世紀第Ⅳ四半期	奈良県	現、天武・持統陵
7	束明神古墳	36.0	八角墳	7世紀末	奈良県	推、草壁皇子墓
8	岩屋山古墳	29.2	八角墳	7世紀前半	奈良県	
9	一本杉古墳	22.9	八角墳	7世紀前半	群馬県	
10	稲荷塚古墳	22.0	八角墳	7世紀前半	東京都	
11	中尾山古墳	20.6	八角墳	8世紀初	奈良県	推、文武陵
12	三津屋古墳	15.5	八角墳	7世紀第Ⅲ四半期	群馬県	
13	牽牛子塚古墳	14.0	八角墳	7世紀後半	奈良県	推、齊明陵
14	中山荘園古墳	13.5	八角墳	7世紀第Ⅱ四半期	兵庫県	
15	尾市1号墳	10.5	八角墳	7世紀第Ⅳ四半期	広島県	
16	武井廃寺	17.4	八角墳		群馬県	
17	忍坂8号墳	12.0	不明	7世紀中～後半	奈良県	正六角形石室

多角形墳一覧表

【メ モ】

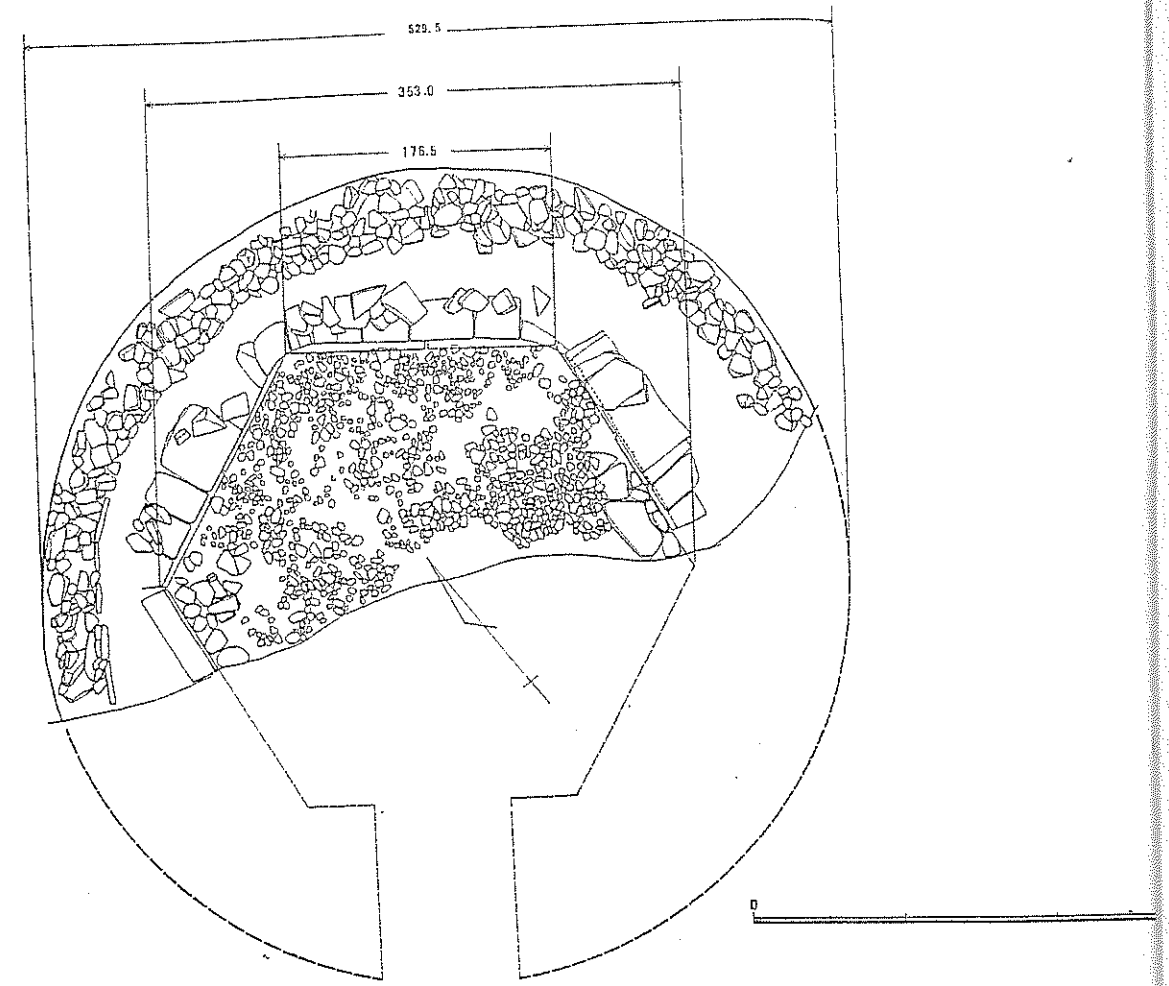


【参考資料】



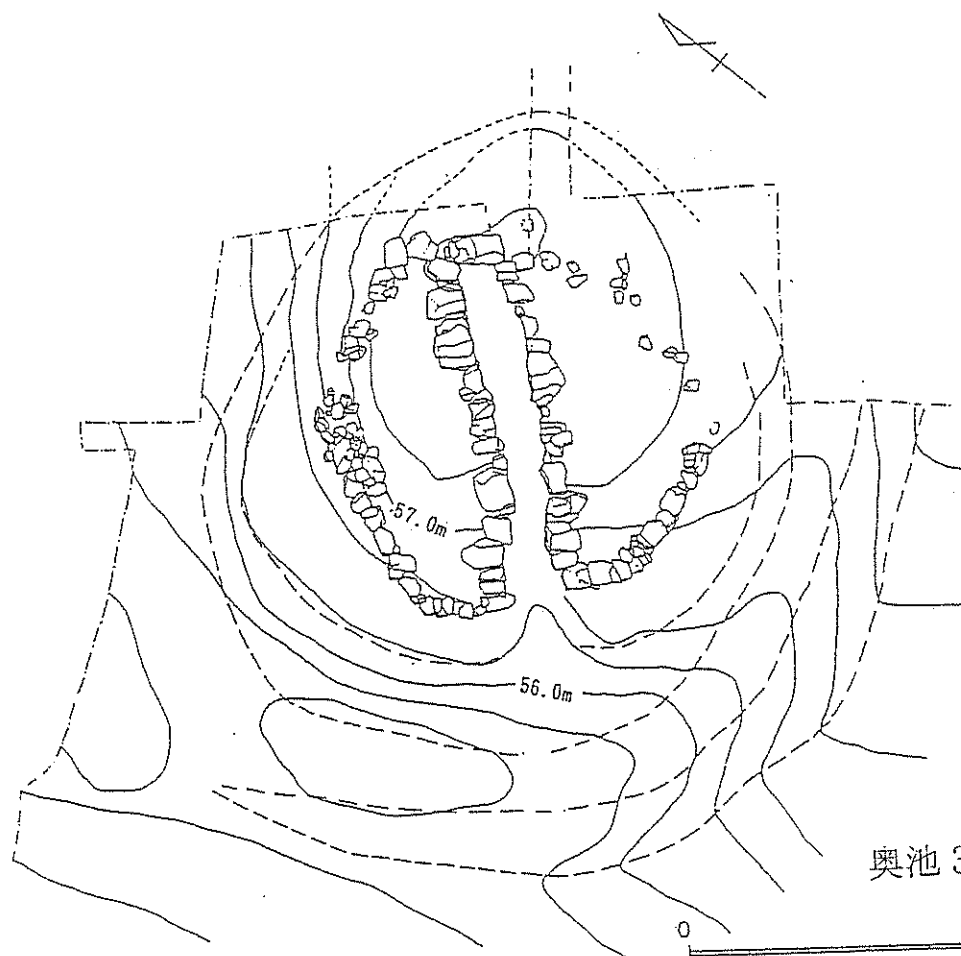
塩野六角古墳

安富町教育委員会 1994『塩野六角古墳』

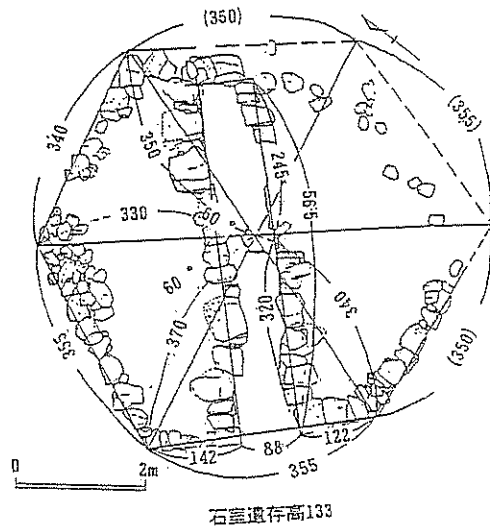


忍坂8号墳

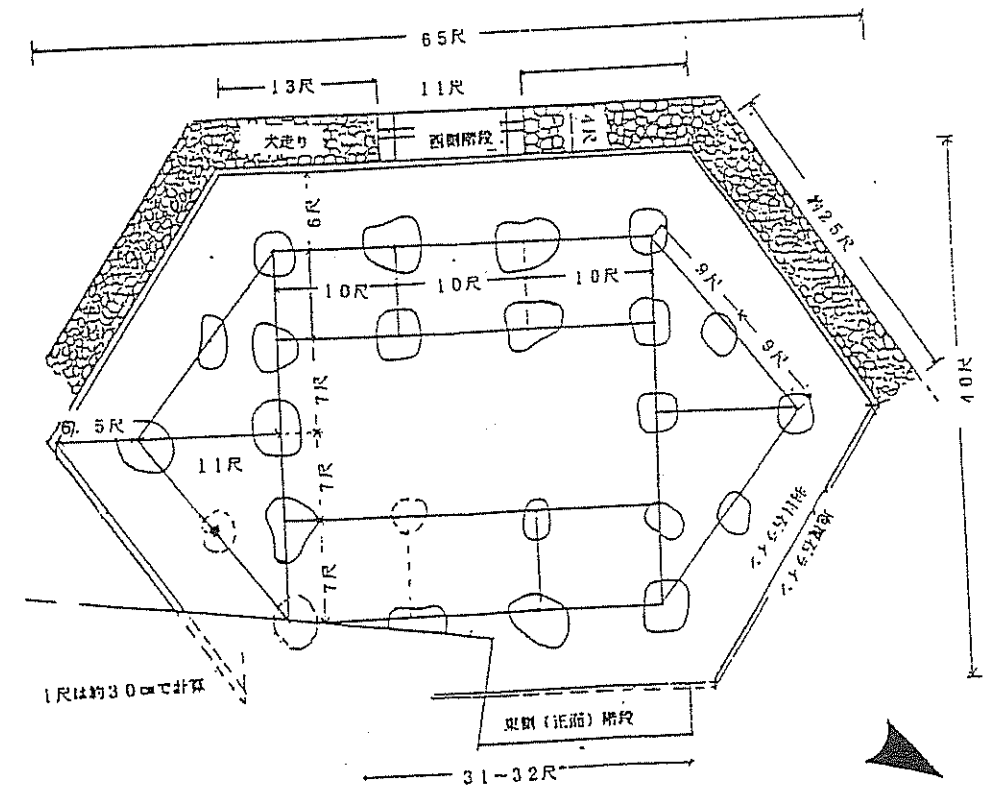
榎原考古学研究所編 1978『桜井市外鎌山北麓』



奥池3号墳



石室遺存高133



加守廃寺・六角堂

榎原考古学研究所・当麻町教育委員会 1994『加守寺跡第3次発掘調査現地説明書』

キトラ古墳の調査

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村大字阿部山136-1
調査原因 キトラ古墳壁画保存対策に係わる石室内の発掘調査
調査期間 平成16年6月10日～平成16年7月8日
調査面積 約2.5㎡
調査機関 奈良文化財研究所・橿原考古学研究所・明日香村教育委員会

はじめに

キトラ古墳は昭和58年にファイバースコープによって、石槨内に玄武の壁画が描かれていることが判明した終末期古墳である。その後、平成9年には墳丘周辺の確認調査を行い、直径約14mの円墳であることがわかった。翌年には小型カメラによる再探査を実施、青龍・白虎と天井に最古の天文図が見つかった。さらに平成13年にはデジタルカメラによる探査で南側に真っ赤な朱雀を確認、獣頭人身の十二支像も判明した。これらの成果を受けて、壁画の保存と内部調査のための事前調査として、墓道部の調査が文化庁によって実施され、石槨内部の保存処理と発掘のための覆屋が建設された。

このような経緯を経て、平成16年1月から、覆屋内で墓道の残り部分を調査、そして6月からは石室内部の調査を実施した。

石室

石室の構造

石室は凝灰岩切石を組み合わせた構造となっている。石室内寸法は、長さ240cm、幅104cm、高さ114cmで、天井部分は屋根形に彫りくぼめている。一方、天井外面も墓道から見える部分のみ屋根形の加工を施している。盗掘孔は南側石の西寄りを縦に開けられており、ここから土砂が流入している。

堆積状況

石室内には調査前から土砂が堆積していることがわかってきた。この土砂は石室内北側では数mmの泥土の直下に漆塗木棺片の堆積層が3～4cmの厚さで堆積している。棺金具・琥珀玉・鉄製品はこの中から、人骨片・歯牙はこの層の上面から出土した。木棺片の堆積層と床面の間には泥土層が薄く堆積する。

このような堆積状況からみて、石室内が水没と乾燥を繰り返した結果に形成された状況とみられる。よって、棺の位置や副葬品・人骨などの位置を示すような状況はみられない。

出土遺物

人骨片 約15点：上顎・頭蓋骨・歯など。熟年～老年で性別は不明。
銅製棺金具 5点+α：直径4cmの六花形。裏側に布着せした漆塗木棺断片が付着。棺の内側に固定された釘隠金具。
金銅製棺飾金具 1点：直径約7.5cmのハート形忍冬文3単位を円形に配した、金銅製透かし彫り金具。棺の外側に固定された環座金具。
金銅板断片 2点：薄い金銅板の断片。棺飾金具か？
琥珀玉 2点：直径8.5～9.5mmのほぼ球形。孔あり。
鉄製品 2点：長径3.5cm、短径1.7cm、厚み1cmの楕円形環状製品。表面にS字の連続した文様の金象眼がある。帯執金具か。
漆塗木棺断片 多数：内外面とも布着せののち黒漆塗り。内面はさらに水銀朱を塗布。木質材の厚みは1cmほど。
土師器皿 1点：直径8cm、深さ1cmの盗掘時の灯明皿。鎌倉時代のもの。

壁画

北壁：玄武・獣頭人身（亥・子・丑）
西壁：白虎・獣頭人身（戌）
東壁：青龍・獣頭人身（寅）
南壁：朱雀
天井：天文図・日像・月像

新知見

- ・十二支像寅に線刻を確認。画像を転写するための下書き。
- ・同様の線刻は玄武・白虎・朱雀・天文図の一部でも確認。
- ・天文図では67個の星座と、約350の星を確認、さらに同定中。
- ・中心にコンパス穴を確認。

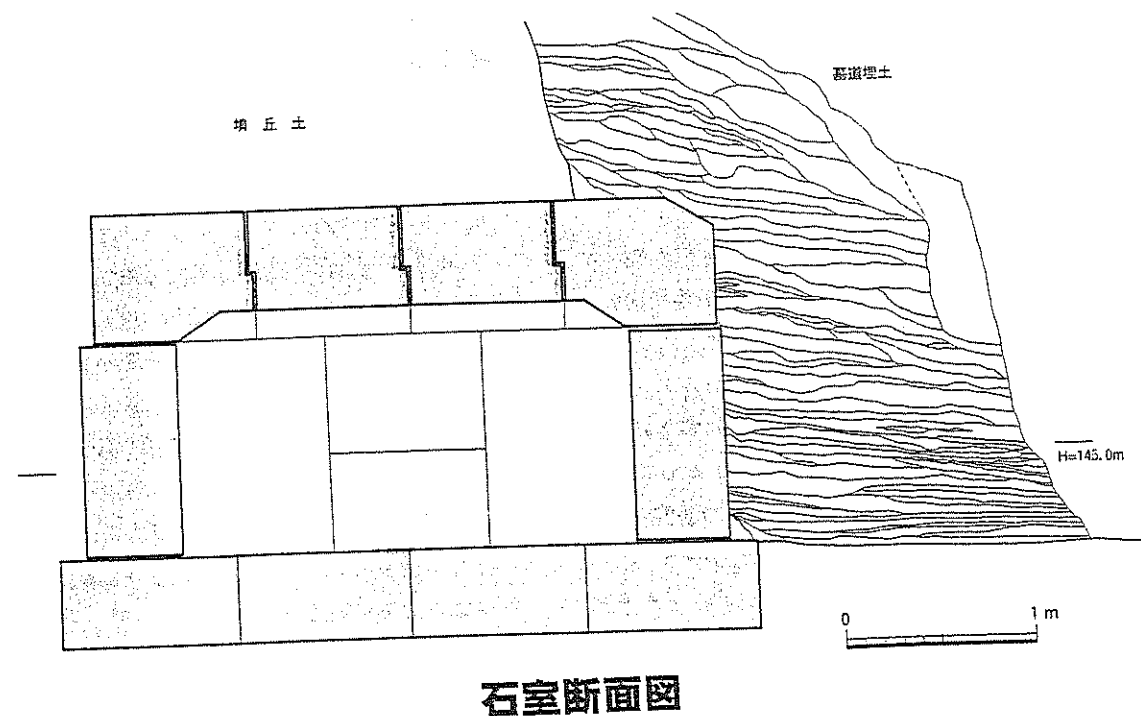
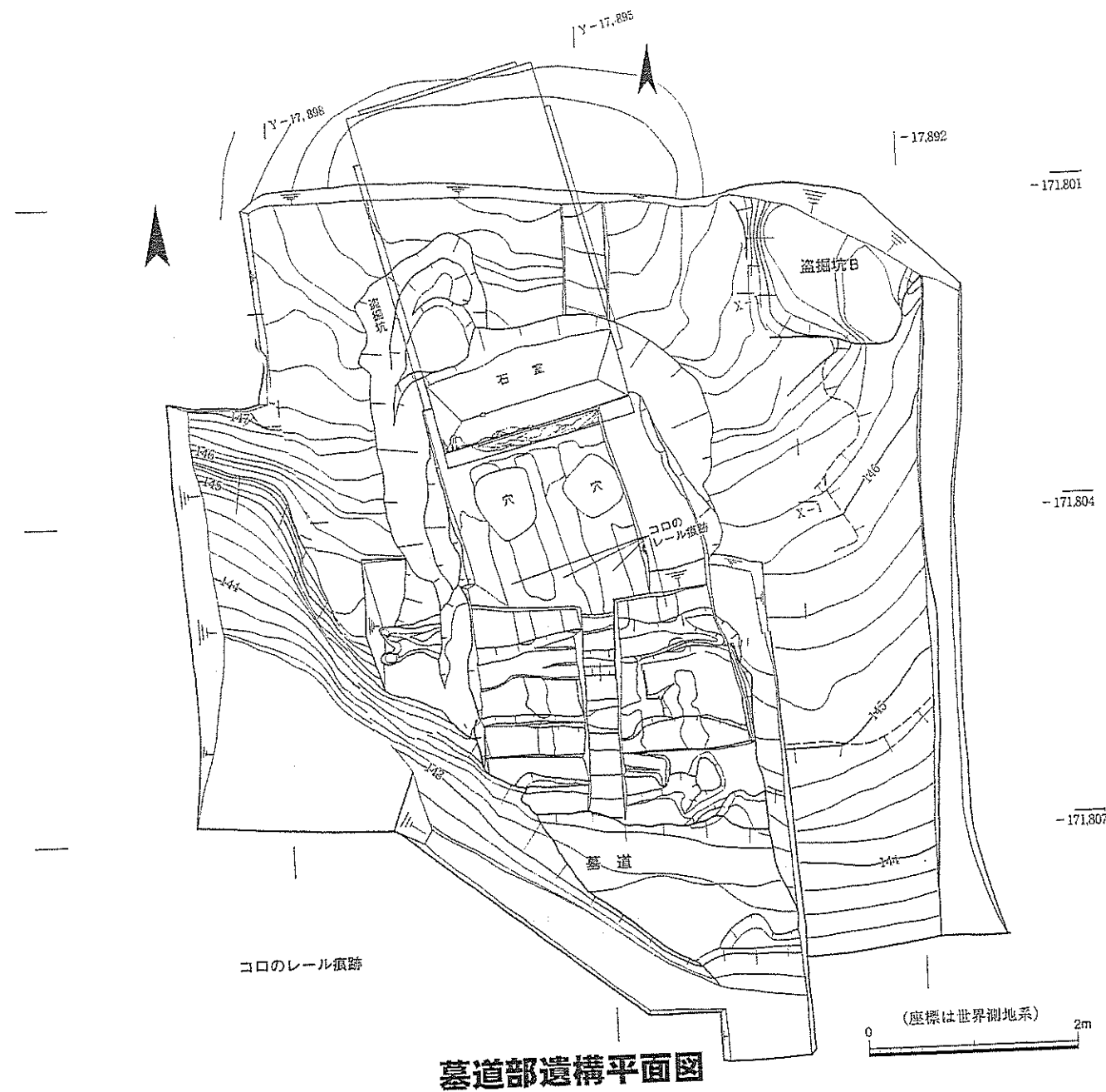
まとめ

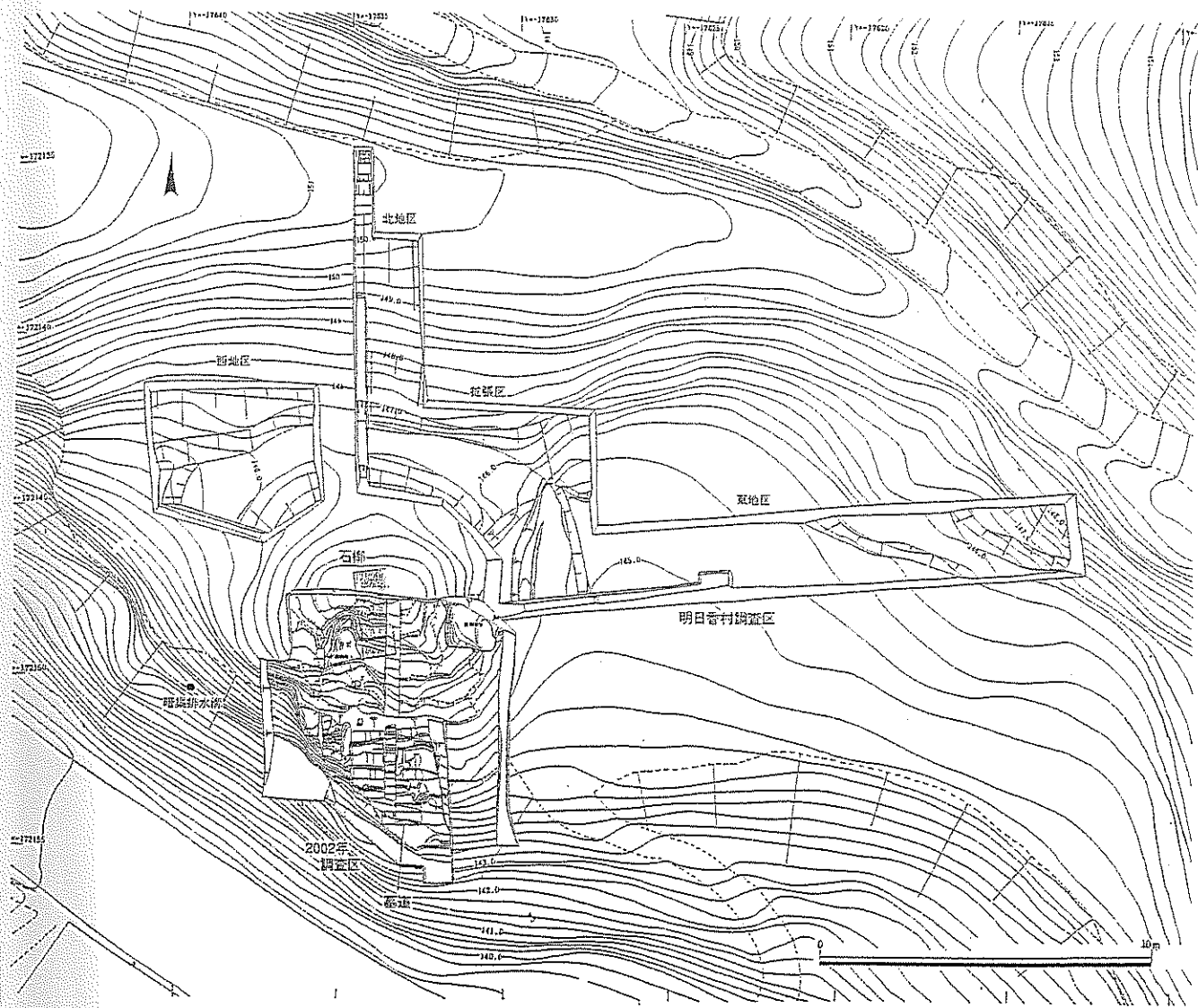
今回の調査ではキトラ古墳の石室内の状況が判明した。出土遺物から、内部には金銅製飾り金具を付けた漆塗木棺が安置されていたことが判明し、副葬品として金象眼帯執金具を付けた刀や琥珀玉があったことがわかる。さらに人骨から、熟年～老年の人物であったことが明らかとなった。また、壁画には下書きの線刻がみられることも新たに判明した。これらの成果を同時代の高松塚古墳・マルコ山古墳・石のカタ古墳などと比較することによって、今後の研究が進むと期待される。しかも、調査で出土した土砂の水洗いはまだ終わっておらず、遺物の分析もこれからであることから、まだ新発見も予想される。

現在、キトラ古墳では壁画の保存方法について検討した結果、壁画を石室外へと取りだして保存することが決定した。すでに青龍・白虎についてははぎとり作業が終了しており、今後は玄武・朱雀・天文図についても、はぎとりが予定されている。これらの壁画が国民に親しまれる形で保存されることが望まれる。

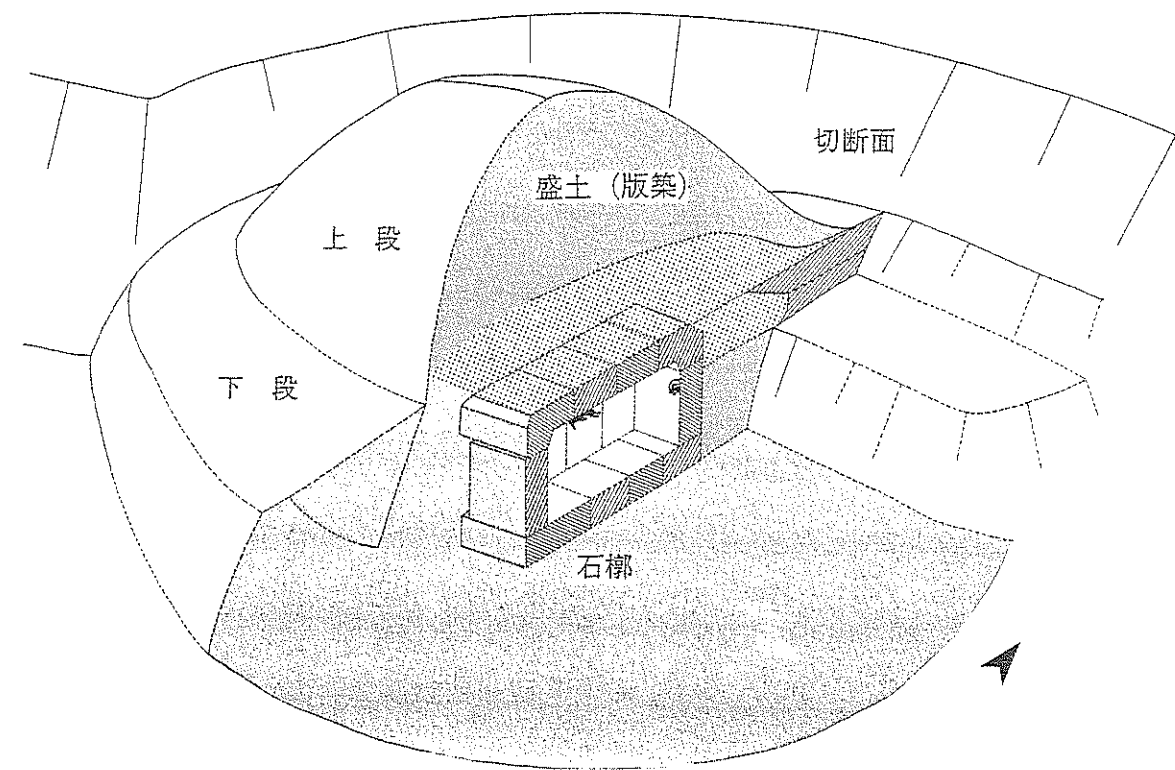
	キトラ古墳	石のカラト古墳	マルコ山古墳	高松塚古墳
位地	明日香村阿部山 ウエヤマ136-1	奈良市山陵町 別当谷1964	明日香村真弓 ミツツ146	明日香村平田 高松444
調査	昭和58年・平成9・10・13 ～15年(1983・97・98 ・01～04)	昭和54年 (1979)	昭和52・53年・平成2・16年 (1977・78・90・04)	昭和47・49年・平成15年 (1972・74・2003)
立地	東西に伸びる尾根 の南斜面、中腹部	南北に伸びる丘陵 の東側の緩斜面	北西に伸びる丘陵 の南斜面	北西に伸びる丘陵 の西南斜面
墳丘	二段築成の円墳 直径下段13.8m 上段9.4m 高さは西側で約3.3m 墳丘南斜面に暗渠がある	上円下方墳 一辺13.8m 上段直径9.2m 高さ上段1.55m 下段1.36m 墳丘下・周辺に暗渠がある 墳丘に石を張る	六角形墳 下段約24m 上段約18m 見かけの高さ約5.3m 石敷下・墓道の下に暗渠がある テラス・周溝處にパラスを敷く	円墳 直径約20m 下からの見かけの高さ約9.5m
盛土	数cm単位の版築 上段の墳丘裾に板 状痕跡と杭の跡	数cm単位の版築状 墳丘全面に葺石を施 す	数cm単位の版築 墳丘一段目及び外 周の溝に礫を敷く	数cm単位の版築 幅5～6cmの溝が 板状痕跡の可能性
石材	凝灰岩切石 (二上山屯鶴峰)	凝灰岩切石 (二上山屯鶴峰)	凝灰岩切石 (二上山鹿谷寺)	凝灰岩切石 (二上山屯鶴峰)
石材個数	床石4 扉石1 奥壁2 天井石4 側石各3+α (計17+α石)	床石4 扉石1 奥壁1 天井石4 側石各3 (計16石)	床石4 扉石1 奥壁2 天井石4 側石各3 (計17石)	床石3 扉石1 奥壁1 天井石4 側石各3 (計16石)
石槨規模	長：240.0cm 幅：104.0cm 高：114.0cm 石槨内は家形(高さ15.5cm)	長：260.0cm 幅：103.0cm 高：106.5cm 石槨内は家形(高さ10cm)	長：271.9cm 幅：129.7cm 高：135.3cm 石槨内は家形(高さ8cm)	長：265.5cm 幅：103.5cm 高：113.4cm
漆喰	石槨内全面 (厚さ数mm)	なし	石槨内全面 (厚さ2～7mm)	石槨内全面 (厚さ2～7mm)
壁画	北壁 玄武・十二支 西壁 白虎・十二支 東壁 青龍・十二支 南壁 朱雀 天井 天文図 月像・日像	壁画なし	壁画なし	北壁 玄武 西壁 白虎・月像 男女子群像 東壁 青龍・日像 男女子群像 天井 星宿図
遺物	漆塗木棺 金銅製棺金具 金象眼帯執金具 鉄製大刀 琥珀玉	漆塗木棺 銀製太刀金具 金・銀玉	漆塗木棺 金銅・銅製棺飾 金銅製太刀金具 尾錠	漆塗木棺 金銅・銅製棺飾 海獣葡萄鏡 銀製太刀金具 琥珀・ガラス丸玉

終末期古墳比較表

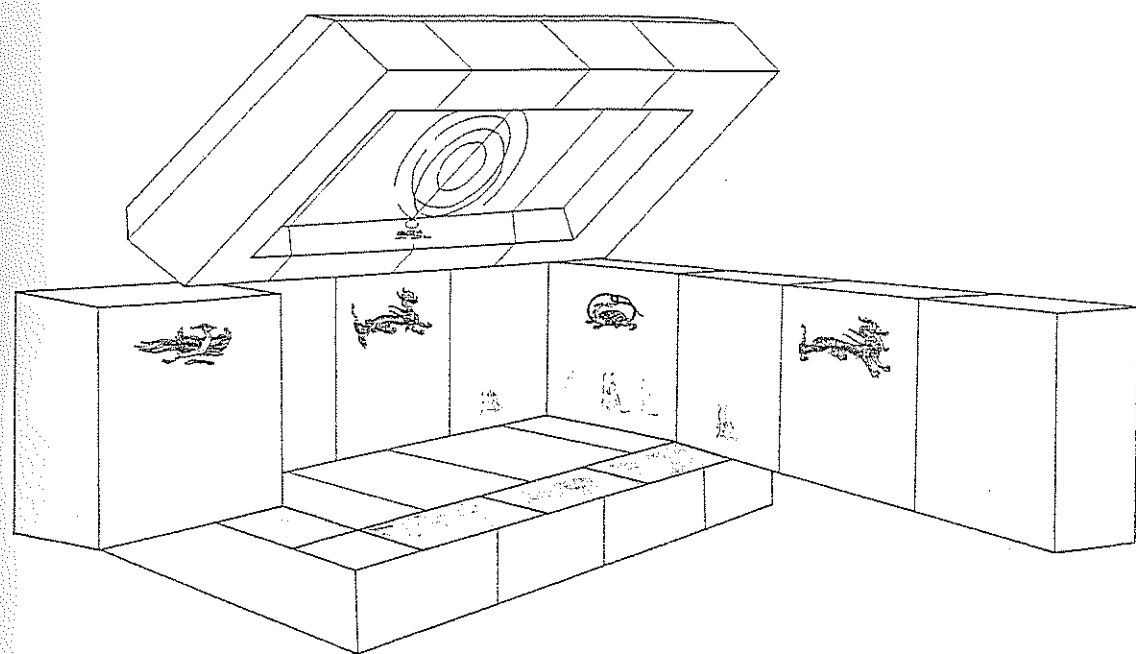




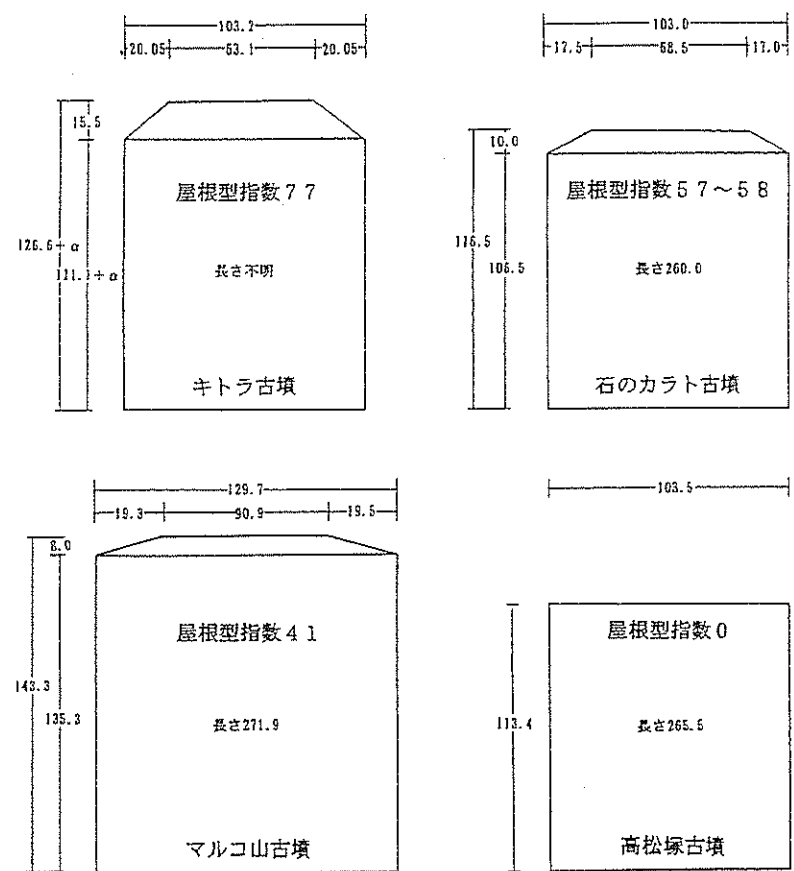
キトラ古墳調査位置図



キトラ古墳概念図



キトラ古墳石室概念図



終末期古墳比較図

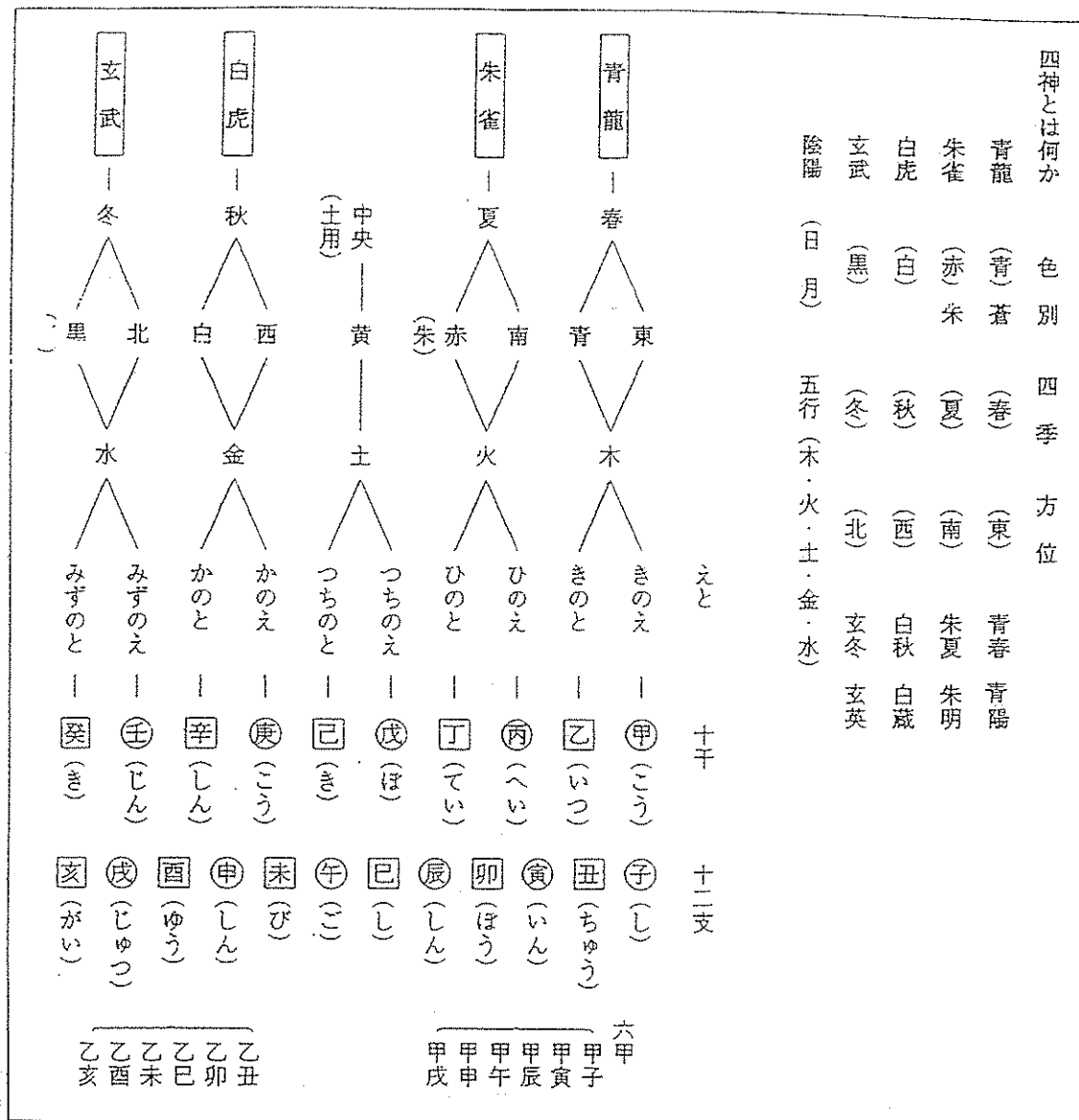
記念講演

「私見・ネトラ古墳の壁画—天文図・十二支像の持物について—」

明日香村文化財顧問

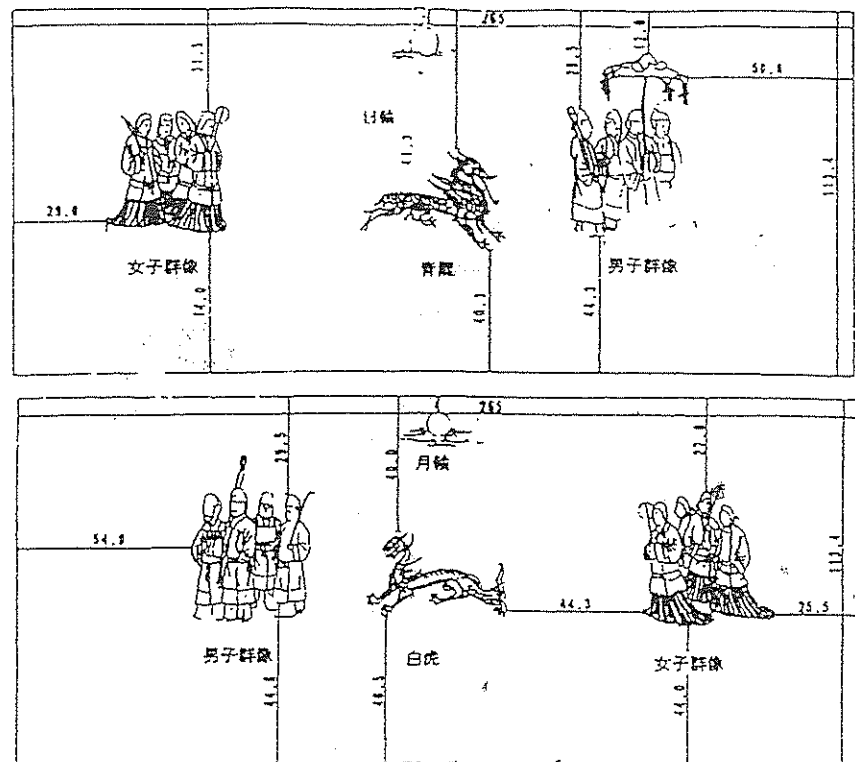
関西大学名誉教授

網干 善教氏

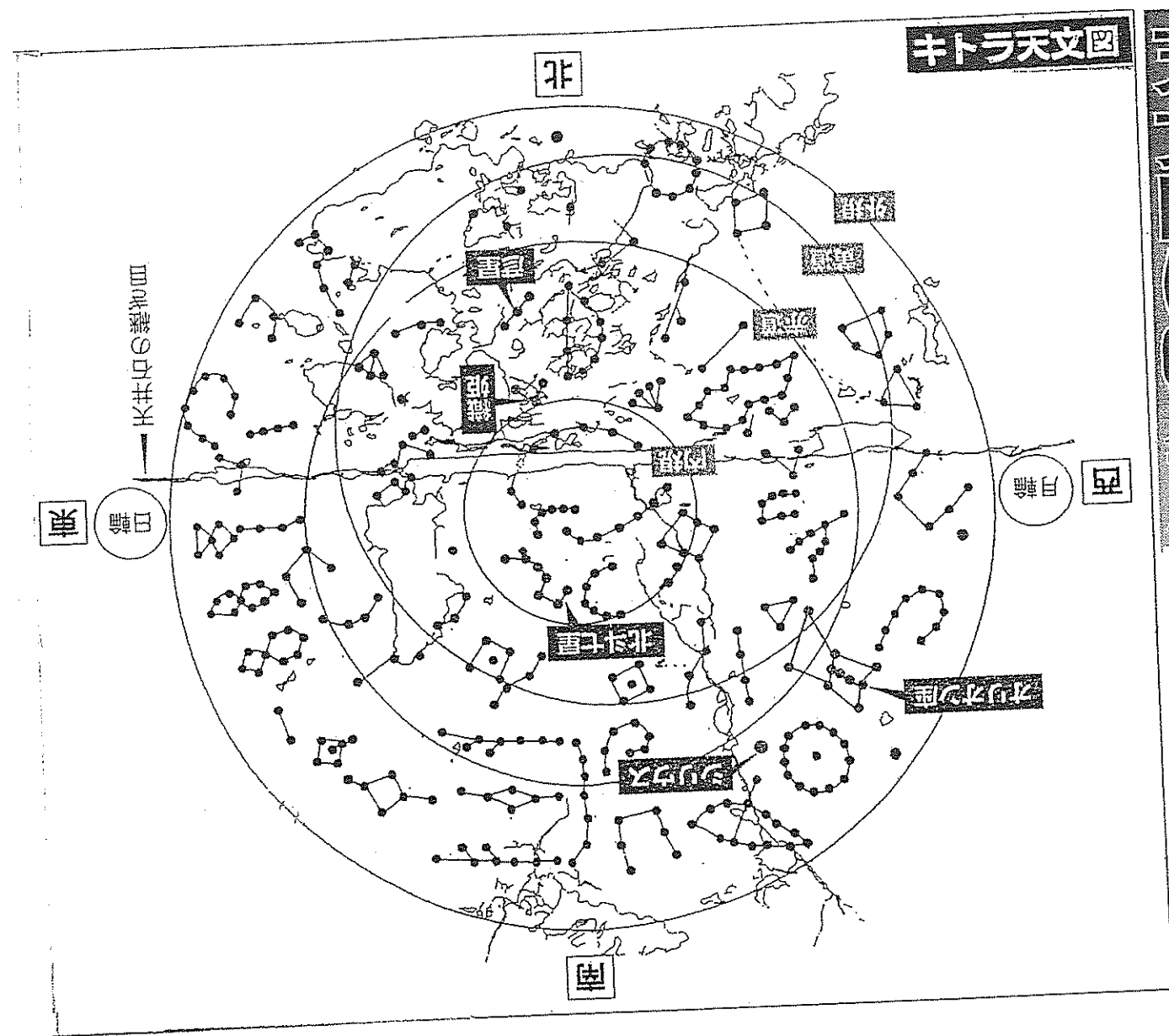


キトラ古墳の壁画(メモ)

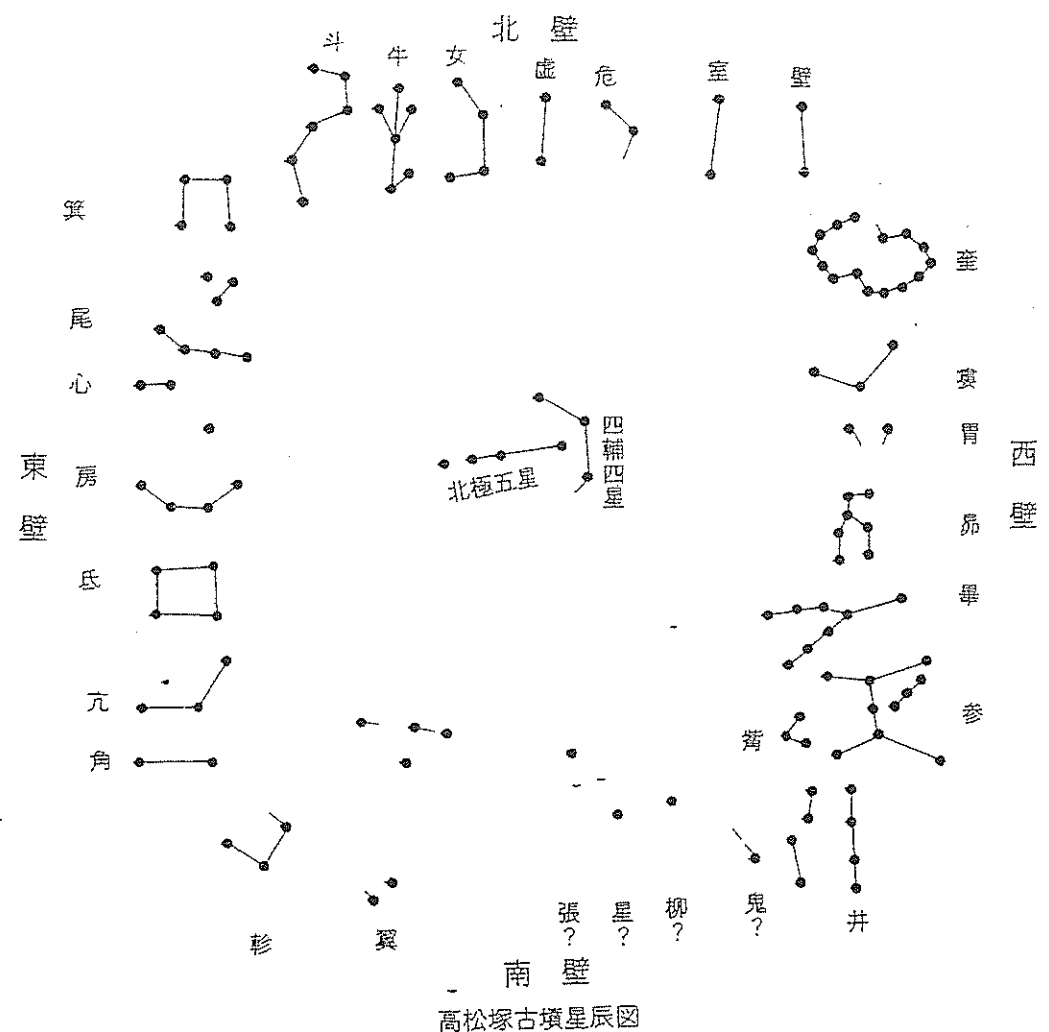
- 天井星宿図 紫微垣と廿八宿、外規と内規、赤道と黄道
橋本概念図と宮島概念図 淳祐天文図と李朝(高句麗)天文図
廿八宿とその他 星宿図の比較
分野図(分野思想、分野説との関連)
キトラ古墳星宿図と通常の星宿図との90°の誤記(赤道と黄道の交点)
裏焼の原因(白虎図も)
- 日・月像
日像(金、東) 三足鳥(三脚鳥) 玉虫厨子 サッカーワールドカップ日本
月像(銀、西) 蟾蜍(蛙) 体が大きい、皮膚にいぼいぼ 墓頭の両側から
白色の液を出す(夜行)
- 四神図
青龍 - 形態(高松塚 その他 中国、高句麗との比較) クリーニング
朱雀 - 顔顔の表現 - 東アジアの朱雀図との比較
朱雀と鳳凰図との比較
白虎 - 高松塚壁画との比較(細部) 裏焼きか
玄武 - 西向き 亀と蛇の絡み方 東アジアの図像との比較
- 高松塚古墳 - 人物群像 キトラ古墳 - 獸頭人身(十二支の可能)
持ちもの - 鉤鏝の問題
十二支像の変遷 文字、俑、十二支俑、墓誌、壁画
人物像の有無 その他の題材
- 漆塗 木棺(夾紵棺との相違) 棺裝飾金具、直刀
その他副葬品
- 画家の問題 顔料の問題 隈取りの問題 計画性の問題
- 被葬者の問題



高松塚古墳壁画人物像の高さ比較図
(上:東壁, 下:西壁)



天文図に68星座
350の星



高松塚古墳星辰図

【星宿図について】

高松塚古墳（以下高松塚）やキトラ古墳の石柳天井に星宿図が描かれていた。高松塚では中央に紫微垣（しびえん、北極五星と四輔四星）が表現され、キトラ古墳では内規と外規、赤道と黄道、紫微垣と廿八宿、その他の星宿が描かれているが 高松塚より星座の数は多い。

キトラ古墳の星宿図については宮島概念図と橋本概念図が示されているが、石柳の内部調査の進捗によって明らかになるであろう。

石柳の天井に星宿を表現するのは分野説、分野思想によるものである。このことは小島祐馬氏の論考がある。『広辞苑』（岩波書店）では分野の解説として「古代中国で全土を天の二十八宿に配し、各地を司る星宿を定めた天上の区分」としている。

この星宿図は中国の淳祐天文図や高句麗（李朝製作）「天象列次分野之図」などと比較し、個々の星宿図の類例と詳細に検討しなければならない。

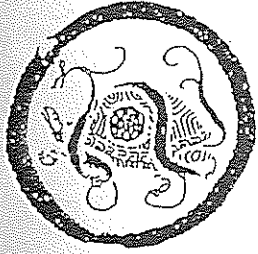
しかし、『天象列次分野之図』の原因になったという高句麗の石刻天文図の唯一の印本は、李朝の太祖が即位し新しく李王朝が開かれた際に献上された、と言うのである。私はこれは、まさに天が王者の治政を称賛して出現させるという「祥瑞」の一類にほかならないもので、高句麗云々はまったくの作り話に過ぎないと考えている。他に、高句麗に石刻天文図はもとより天文図があったという史料はまったくないのである。もちろん、文献史料に残っていないから天文図がなかった、と言うのでは決めてない、石刻天文図の話は怪しいが、中国の天文図が伝わっていたことは言うまでもない。だから、粗雑な表現とはいえ中国流の星座が古墳壁画に描かれているのである。

けれども、もしキトラ古墳の手本になるような天文図があったなら、なぜもっと精密な星座表現の古墳壁画が存在しないのか、その点やはり疑問がわく。しかし、古墳壁画に精密な天文図を描かねばならないという必然性はないであろう。粗雑でも天象を描き、天を表現すれば良いであろう。

キトラ古墳の天文図も中国の影響と考えている。その点、橋本先生説とは大いに相違しているように見える。

橋本先生は、高句麗の古天文図をキトラ古墳の天文図の手本とみなされているようである。その有力な論拠には、李朝初頭の『天象列次分野之図』の存在がある。この図は、その図の下部に成立の由来が書いてあり、大要を言えば、高句麗の平壤城に石刻の天文図があったが、高句麗滅亡時（668）の兵乱で大同江に沈み失われた、印本の存するものも絶無であった。ところが、李朝の太祖の即位の初めに、一本を献上する者があり、そこで太祖が重刻させようとしたが、この図は年代が歳久しく経過して星度もすでに違っているから、さらに推歩（天体運行の推算）し訂正して新図を作ることになり、結局、太祖4年（洪武28年、1395、日本の応永2年）にできたものである。だから、この図そのものは新図であるが、橋本先生は、その原因というべき高句麗の石刻天文図のような古天文図があって、それがキトラ古墳の天文図の手本になった、と言われるわけである。

第1類型 A式

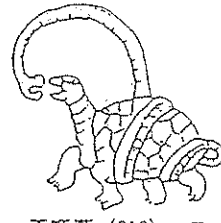


漢代瓦当

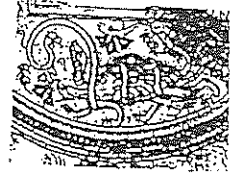


四川省渠縣趙家坪

第1類型 B式



王暉墓 (212)



黒川古文化研究所唐永徽元年 (650) 鏡

第2類型 A式



五箇墳四号墳

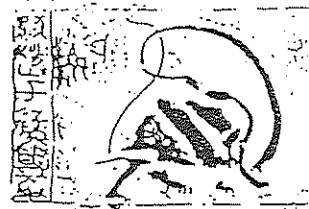


集安四神塚

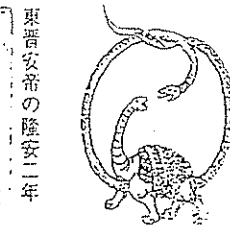


薬水里

第2類型 C式



江蘇省鎮江市画像磚墓



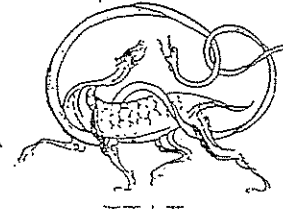
東晋安帝の隆安二年

蘇思昂 (745)

第2類型 B式



模式図



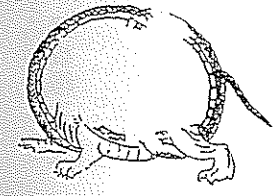
江西大墓



湖南省長沙市郊隋墓発掘四神鏡



張去奢 (747)



高松塚古墳



キトラ古墳



豆原建 (744)



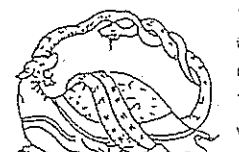
郊国大長公主 (786)



正倉院円鏡



薬師寺本尊台座



忠思礼 (744)



李敬美 (833)

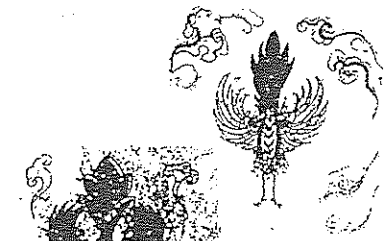
玄武の分類

第1類型「静止」



徳興里古墳の壁画の鳥

本塚第3室西面第4層持送りの鳥

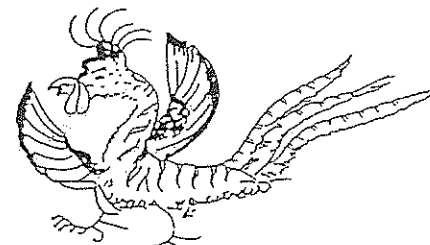


高元珪墓壁画の朱雀



蘇思昂墓壁画の朱雀

第2類型「歩行」



薬水里壁画古墳の朱雀

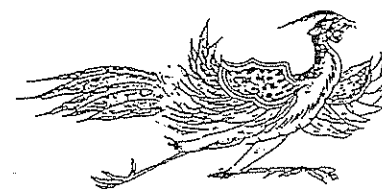


集安四神塚玄室南壁の獸面鳥身



府君張漸墓誌の朱雀

第3類型「顔顔」



飛鳥キトラ古墳の朱雀



真坡里1号墳の朱雀



魏胡明相の墓誌の朱雀



豆盧建墓誌の朱雀



史思礼墓誌蓋の朱雀



郊国大長公主墓誌の朱雀



宝鷄市法門寺地宮の鳳凰文

第4類型「飛翔」



真坡里第1号墳の鳥



集安五箇墳4号墳壁画の朱雀



唐節愍太子李重俊墓の鳥形文

朱雀の4つの形態

本先生
されて
図」の
要を言
68)
ところ
祖が重
でに違
ごとに
できた
その原
キトラ

鉤鑊について

奈良県明日香村阿部山にあるキトラ古墳の石槨内に高松塚古墳と同様極彩色の壁画が描かれており、しかも玄武の図像を確認したことから四神図があることが確実になった。

その後、道路の新設など諸般の事情により調査は遅延していたが、再度ファイバースコープの挿入によって、石槨北壁の玄武図の下に人身像らしきものと両頭に鉤状のものがあ



ことができた。ちなみに東壁の北端に描かれた像が獸頭人身像であり、その獸首が十二支のうち寅である可能性が指摘され話題を呼んだ。ところで北壁に描かれている赤色の両端が鉤状になる器物に注目した私たちは、これが一体何であるかを考えようと、資料を検索してきた結果、中国古代兵器の一種である「鉤鑊」であろうと考えた。以下この問題について説明してみたい。

鉤鑊

は、敵の刃を払うための武具である。鉄の棒を湾曲させて、刃を受けとめやすくしており、グリップの部分には小さな鉄板の盾がリベット留めされて、こぶしを保護している。歩兵たちは右手に刀や鉞をもち左

手に鉤鑊を持って戦った。大きな盾は敵の矢から身を守るには適しているが、接近戦では視界をさえぎって戦場の邪魔になる。鉤鑊はそのような戦場での需要から考案された武具で、後漢時代にはさかんに用いられた。

味がある。「鑊」について諸橋徹次「大漢和辞典」には兵器としている。注目すべきは①に「鉤鑊は兵器の名。両頭に鉤、中央に外向きの刃があり、或は推し、或は引いて用いる兵器」と解し「説文」や「釈名、釈兵」を挙げている。

さらに「鉤」の熟字語例のなかに「鉤鑊」を挙げ「兵器の一種。両頭にかぎがあつて、或は引きよせ、或は推しやる用をなすもの」と説明している。

そこで判明したことは兵器であること。両頭に鉤を付すことであるがそれがどのような形態のものであることはわからない。

ところが、『文物』(一九六五年第二期)に李京華氏の河南省鶴壁市における建設工事中に出土した墳墓副葬品の説明のなかに「鉤鑊の形制是有鉤有鑊」とあり、上鉤長二六釐、下鉤長一五・七釐、連同鑊部共長六一・五釐」と説明し、正面図、側面図、鉤鑊図(約八分の一)の実測図を挙げています。

さらに、「山東省嘉祥武祠画像石」の「鉄鉤鑊使用図」を掲載している。また、林巴奈夫氏の『漢代の文物』(一九九六年十月、明文舎)にも『漢和大辞典』と同文の説明があり、「銅

山小李家村苗山」や「徐州十里舖」出土の画像石図像を挙げている。

さて、キトラ古墳の当該資料をみると鉤鑊と思われる器財は人身に対して鉤の部分(外向き(西向))になり、上下端とも先端が曲っている。そして鑊の中央部に小柄を付したような把手があり、河南省鶴壁市で出土したものと同じである。この中央の把部は刀剣でいうと鑊の役目をもっているものと思われる。

また、人身(獸頭)の大きさと、鉤鑊の比率も大体良好である。こうしたことからキトラ古墳の器財は鉤鑊であろうことはまず間違いないと考えている。

なお、鉤鑊は「盾より発展したもので防御用兵器に属する」としながら「単純防御の盾よりさらに積極的なもの」とすることに同意する。

図に示された後漢代画像石は一見本来の機能をもつ武器であるが、他面「銅山小李家」出土画像石の説明に「武器の舞」とあるように、武器を持つて舞う武芸にも使用されていた可能性が多分にある。

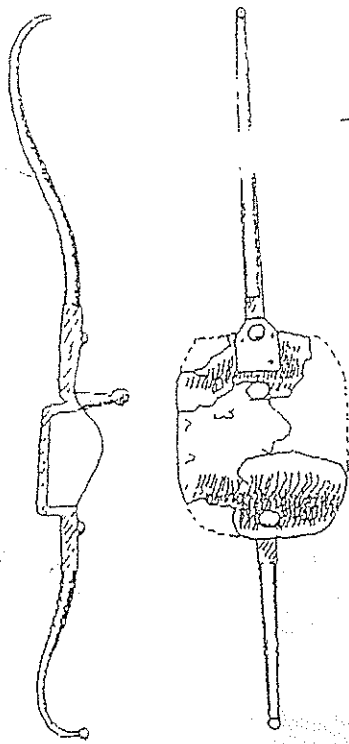
キトラ古墳の場合も槨内や棺を守る獸頭人身像が鉤鑊をもつことは一種の辟邪の意味をもつ精神的な表現であるとも考えられる。

その他の箇所にも四四・三センチから四四・五センチという共通の数字がみられる。このような長さは恐らく高松塚古墳の築造や壁画の描写に使用された二九・四センチ、唐尺一尺の一尺五寸に相当するものと思

う。なお、飛鳥の地域にある特別史跡山田寺跡の発掘調査によると、天武・持統朝に創建されたとみられる講堂での使用尺が二九・四五センチとされるのは興味深く高松塚古墳築造に行なわれていたということに驚嘆する。

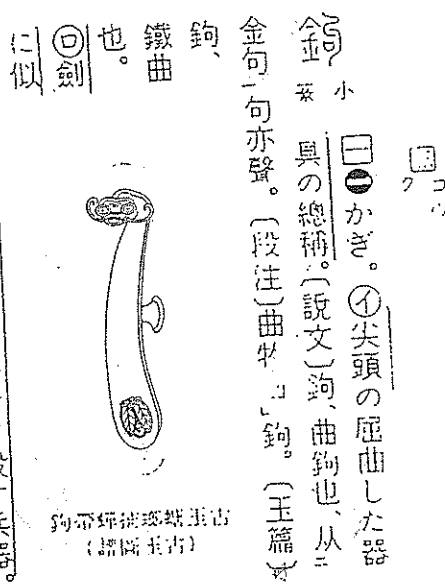
私たちは、このような視点に立って壁画描写の手法からみて高松塚古墳の非常にすぐれた点や日本人が持っていた高度な技術を知ることによって、日本古代文化を見直し、確認する必要があるのではないかと思

6-77 鉄鉤鑊 全長 61.5 厘米、上鉤長 26 厘米、下鉤長 15.7 厘米



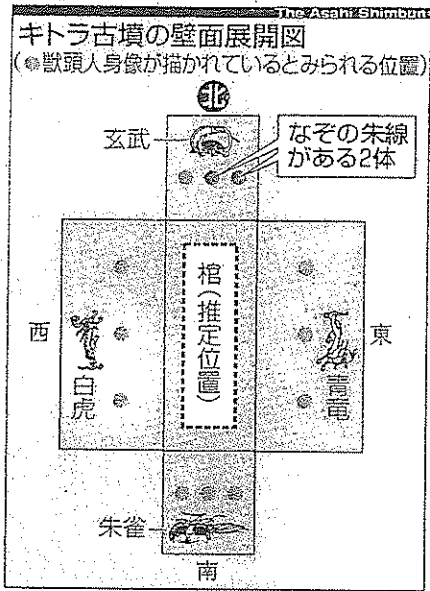
【鉤状】⁴⁷ 罎、つりばりのやうに曲つてゐる形。
〔史記、孝武紀〕夏六月、汾陰巫錦、爲民祠。魏
厓后土營旁、見地如鉤状。
【鉤鑊】⁴⁸ 兵器の一種。両頭にかぎがあつて、或は引きよせ、或は推しやる用をなすもの。
〔釋名、釋兵〕鉤鑊、兩頭曰鉤、中央曰鑊。

【鉤】 40319



鐵曲也。①劍。②劍。③劍。④劍。⑤劍。⑥劍。⑦劍。⑧劍。⑨劍。⑩劍。⑪劍。⑫劍。⑬劍。⑭劍。⑮劍。⑯劍。⑰劍。⑱劍。⑲劍。⑳劍。㉑劍。㉒劍。㉓劍。㉔劍。㉕劍。㉖劍。㉗劍。㉘劍。㉙劍。㉚劍。㉛劍。㉜劍。㉝劍。㉞劍。㉟劍。㊱劍。㊲劍。㊳劍。㊴劍。㊵劍。㊶劍。㊷劍。㊸劍。㊹劍。㊺劍。㊻劍。㊼劍。㊽劍。㊾劍。㊿劍。

鉤鑊 盾より発展したもので、防御性兵器に属す。『釈名』には「鉤鑊、両頭を鉤と曰ひ、中央を鑊と曰ふ。或は推鑊、或は鉤引といふは、之を用ふるの直しきなり」とあつて、推す働きをもつ鑊が盾としての働きもそなえ、鉤によって敵の刃をからめながら、自分の刃を繰り出すことができる。その機能は単純防禦の盾よりはさらに積極的なものであつた。



奈良県明日香村のキトラ古墳(7世紀末〜8世紀初頭)の北壁に、玄武色の線は、中国の古代兵器「鉤鏃」である可能性が高いことが、網干善教(関西大学名誉教授)の分析でわかった。

キトラ古墳 獣頭人身像の朱線 中国の古代兵器か

関大名誉教授分析

奈良県明日香村のキトラ古墳(7世紀末〜8世紀初頭)の北壁に、玄武色の線は、中国の古代兵器「鉤鏃」である可能性が高いことが、網干善教(関西大学名誉教授)の分析でわかった。網干氏は「被葬者を守り、邪をはらう意味がある。壁面が中国の古代思想の影響を強く受けていることがうかがえる」とみている。

玄武の獣頭人身像は3体並んでおり、うち2体の右手付近に朱線が縦に



キトラ古墳の獣頭人身像(北壁東側)の朱色の線(文化庁提供)

中国の出土品は長さ61・5センチの鉄製。キトラ古墳の場合も、獣頭人身像

描かれている。線の上端と下端が外向きに曲線を描いていて、中央には小さい盾のような取っ手があるように見える。

朱線はこれまで、弓ではないかとみられてきたが、網干氏が海外の文献を調べ、朱線の形状や大きさが中国の古代兵器の「鉤鏃」と似ている

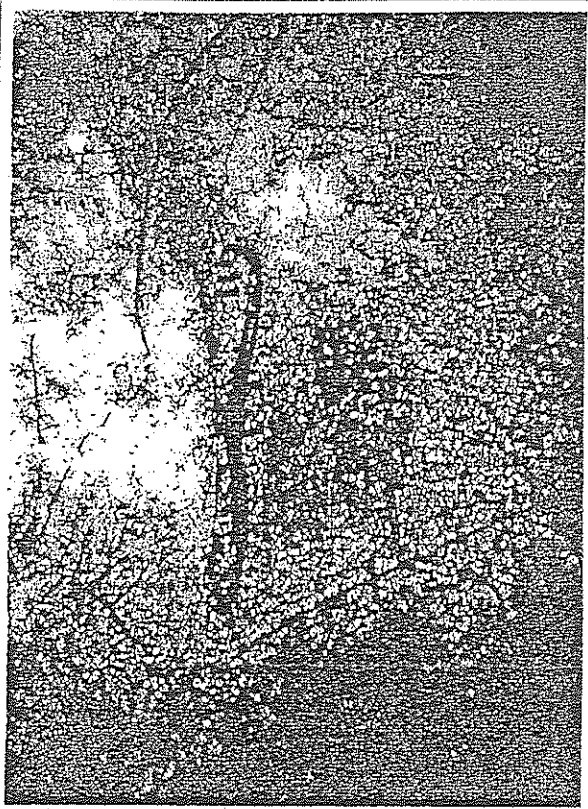
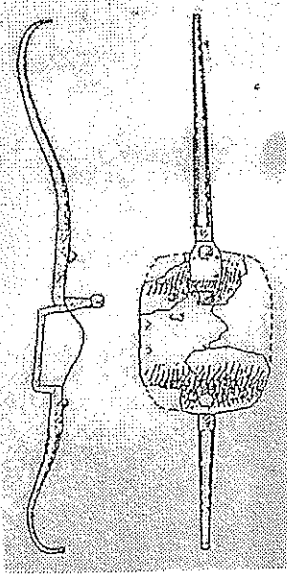
ことを突き止めた。中国の文化財専門誌「文物」(1965年)には河南省鶴壁市で出土した墓の副葬品として「鉤鏃」の説明と正面図、側面図が紹介されている。

鉤鏃は、両端に鉤のある弓形をした古代兵器で、中央に取っ手があり、盾としての防衛的な役目のほか、曲がった先端で敵を引っかけて倒す兵器でもある。

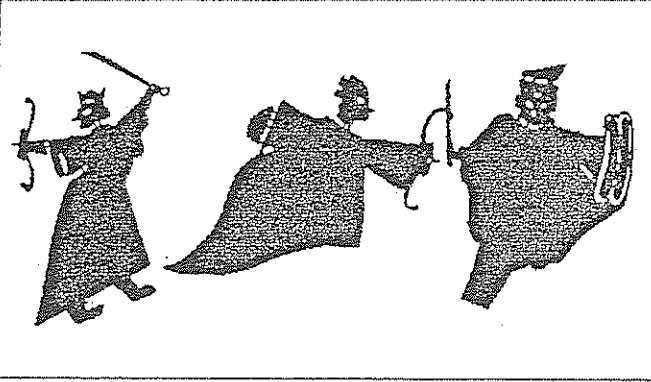
高松塚古墳の発掘担当者だった網干氏は「鉤鏃は防衛の盾というよりも、積極的な兵器。キトラ古墳の朱線が鉤鏃であることは、文化庁が近く行う壁面の赤外線撮影で確かめられるだろう」と話している。

獣頭人身像は、朝鮮半島では新羅の王陵(8世紀)で剣やおのを持つて武装した像の石彫りが見つかっている。

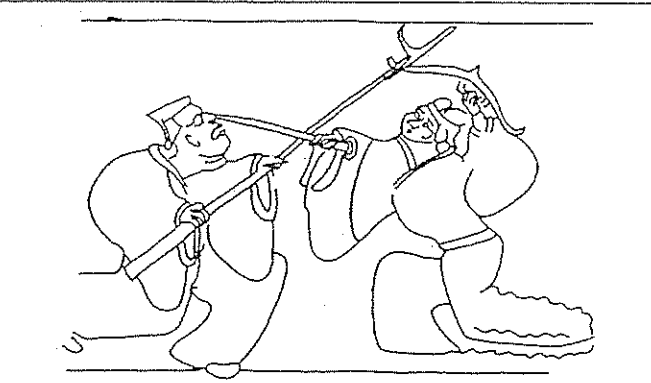
中国・河南省鶴壁市の墓跡から出土した副葬品「鉤鏃」の側面図(左)と正面図(「文物」1965年から)



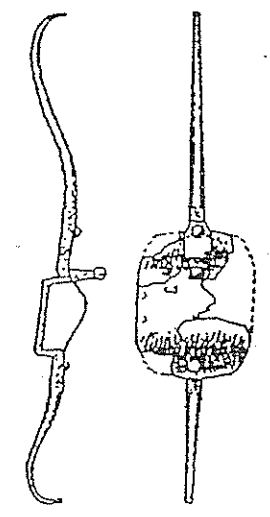
キトラ古墳北壁 鉤鏃図



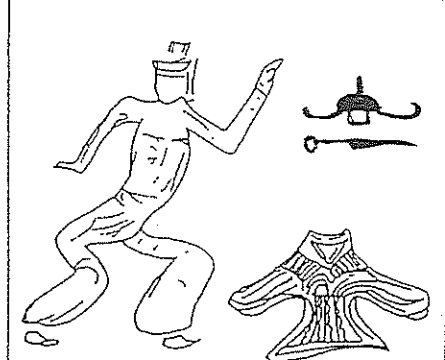
鉤鏃使用图像



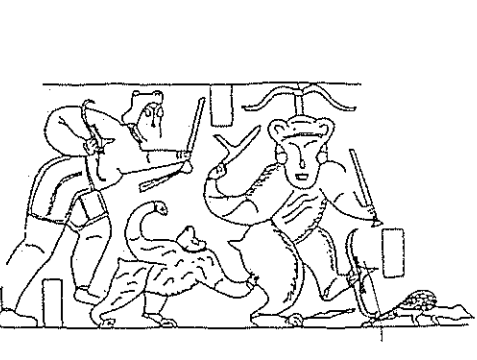
銅山小李村苗山



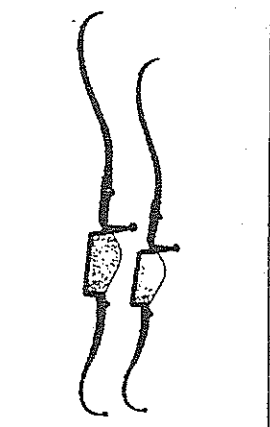
河北省鶴壁市出土の鉤鏃実測図



徐州十里鋪画像石画像



武氏祠左石室天井前城西段



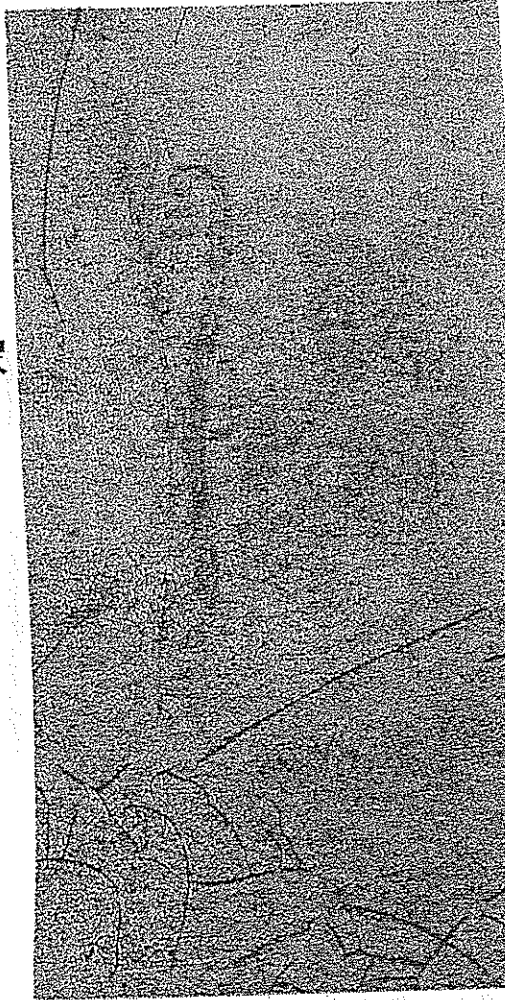
鉤鏃模式図



神鉤持鉤鏃図(拓片) 東晋

ワラビ状の朱線は武器か

十二支壁画 高まる期待



北壁東側にほんやり浮かぶ人物像。右手に古代中国の盾を持っているとの指摘も(文化財研究所「キトラ古墳壁画」より)

奈良県明日香村、キトラ古墳(七世紀末―八世紀初め)の本格調査で、注目されるのが、壁画の正面から撮影する鮮明な画像。二日は、その準備として、石室の盗掘穴の上部を露出させる。穴から直接、カメラを付けたアームを差し入れての撮影で、可動域が拡大。これまでゆがんで見えた東壁の獣頭人身像の表情や、細部が不明確な朱線として現れた北壁三か所の像の輪郭を映し出し、十二支を表す壁画との見方が確定できると期待されている。

キトラ古墳 直接撮影へ

従来は、アームを、長さの第三次調査で発見。三か所、一・五メートルのガイドパイプに、所のうち、十二支の「子」を通して撮影。壁画に触れる(ネズミ)に想定される中、恐れから石室奥に伸ばせ、中央、「丑」の東側は、ほぼ、撮影角度が狭かった。んやりした人物像と、弓形、北壁の朱線は二〇〇一年の持ち物が確認された。古

朱線、古代中国の盾か

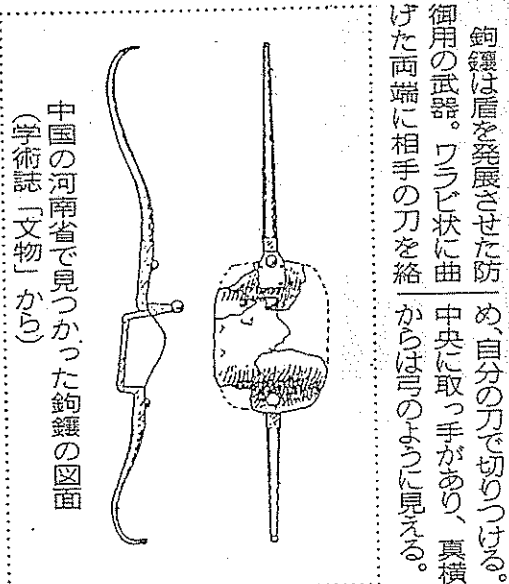
朱線の弓形も謎だったが、一九八三年の発見時から調査にかかわっている網干善教・関西大名教授(考古学)らは、古代中国の防具「鉤鏑」と指摘。鉄棒が弓形に延びた手持ちの盾で、中国・後漢代(二世紀)の石棺の浮き彫りなどに似ているとしている。盗掘穴を露出させての撮影は、三月中旬以降となる予定で、網干名教授は「三つの像とも同じ物を持ち、被葬者を邪気から守ったのだろう。鮮明な正面画像や赤外線写真が早く見たい」と話している。

古代中国の鉤鏑

網干関西大名教授「邪気から守る」

キトラ古墳・獣頭人身像

明日香村阿部山の国特別史跡キトラ古墳(七世紀末―八世紀初め)に獣頭人身像の持ち物として描かれたワラビ状の朱線が、古代の中国で使われた武器の一種「鉤鏑(こうじょう)」の可能性が強いことが、網干善教関西大名教授(考古学)の研究で、三十一日までに分かった。十日に同村で開かれる講演会で発表する。



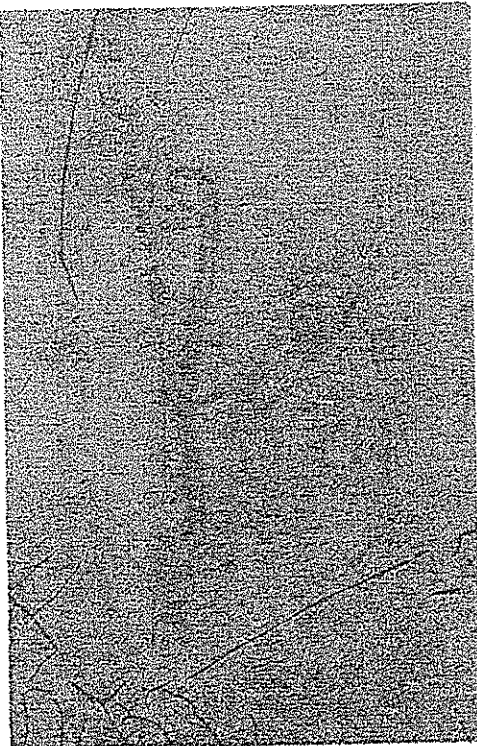
中国の河南省で見つかった鉤鏑の図面(学術誌「文物」から)

中国では、後漢代の画像石に鉤鏑を使う人物が彫られているほか、河南省の古墳(漢代)で実物が出土。全長約六十センチで、手を守る鉄板も付いていた。

網干名教授は、中国の研究論文などから鉤鏑に注目。キトラ古墳に描かれた道具にも取っ手とみられる表現があり、全体の反り方もそっくり。両端の曲がった部分を外側に向けて

おり、画像石に彫られた使い方とも矛盾しない。キトラ古墳の獣頭人身像は十二支と考えられ、石室の四方に三体ずつ配置された可能性が強い。

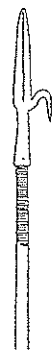
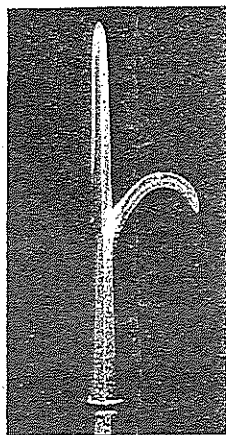
文化庁は三月十八日に獣頭人身像などの壁画を赤外線撮影、画像の分析を進めている。今月中に結果が公表される予定で、肉眼で見えない部分の解明が期待されている。



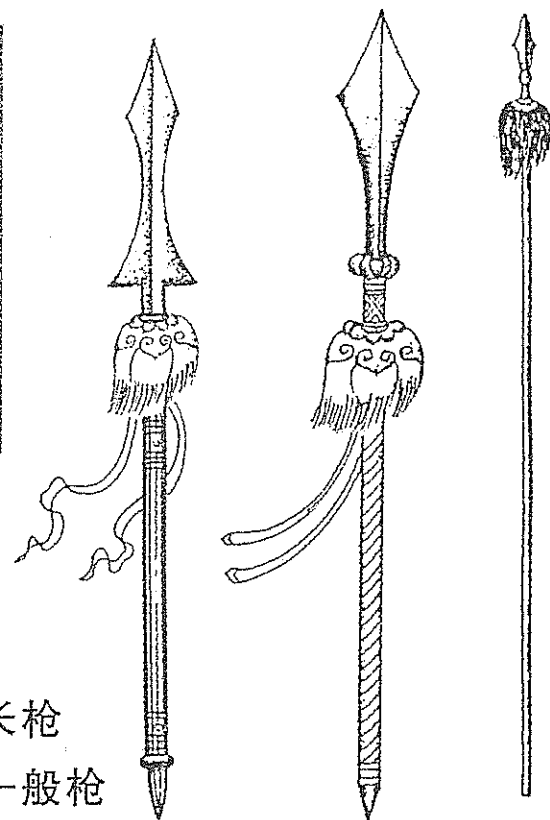
キトラ古墳の石室北壁に描かれたワラビ状の朱線(飛鳥資料館「キトラ古墳壁画」から)



鉞 (正倉院宝物)



長槍
一般槍



懿徳太子李重潤墓壁画

陕西省乾县 唐時代 706年

1971—1972年、陝西省の乾県で李重潤の墓が発掘された。李重潤(682—701)は唐の中宗(李顕, 656—710)の子で、高宗(李治)と則天武後の孫にあたる。706年(中宗の神龍2年)、乾陵に陪葬され、懿徳太子を追贈された。

墓の全長は100.80m、墓の内部には広汎な題材から成る大規模の壁画40余組があり、その面積は約400m²におよぶ。唐代の制度や建築、芸術を研究する上に貴重な資料である。



ほこ・ほう 矛・鉞 *槍と同じく刺突する目的をもつ武器であるが、柄と接合する部分が袋状になった穂先をもつものを矛とよんで槍と区別している。中国では青銅製の袋穂をもった刺兵はすでに殷代に出現している。長さ20cm前後の両翼状やや幅広のもので、袋部(蓋)の両側に環状の耳がついている。この形態の*銅矛は西周時代まで続くが、春秋戦国時代になると身の幅が狭くなり、片耳のついたものと耳のないものがある。朝鮮と日本には狭鋒銅鉞が存在しているが、中国の銅矛とは少し形態が異なる。古墳時代には鉄矛が一般的に使用されるよう

になる。古墳時代の矛には、身の断面が扁平菱形の剣形をなすもの、断面が三角をなすもの、片刃のもの、支刃をもつものなどの多くの種類がある。栃木県七廻*鏡塚古墳出土の鉞は木柄が完存したまれな例である。穂先は全長23.65cm、柄の全長218.4cm・直径2.5cmで、黒漆塗、鉞身に挿入する先端部と、石突に挿入する下端部とが円錐状に仕上げられていた。鉄製の石突が装着されていたが、その形状は腐蝕のため不詳である。文献 森本六爾 1943a. 森貞次郎 1960. 林巳奈夫 1972a. (田村晃一)

ほこ・ほう 矛・鉞 *槍と同じく刺突する目的をもつ武器であるが、柄と接合する部分が袋状になった穂先をもつものを矛とよんで槍と区別している。中国では青銅製の袋穂をもった刺兵はすでに殷代に出現している。長さ20cm前後の両翼状やや幅広のもので、袋部(蓋)の両側に環状の耳がついている。この形態の*銅矛は西周時代まで続くが、春秋戦国時代になると身の幅が狭くなり、片耳のついたものと耳のないものがある。朝鮮と日本には狭鋒銅鉞が存在しているが、中国の銅矛とは少し形態が異なる。古墳時代には鉄矛が一般的に使用されるよう

11	夏	威	禡	施	梓	桅	設	矜	殺	秘	匱	矜	投	芒	矛	戊	片	戈	子	ほこ
	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡
	種	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰
	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡
25	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰	穰
	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡